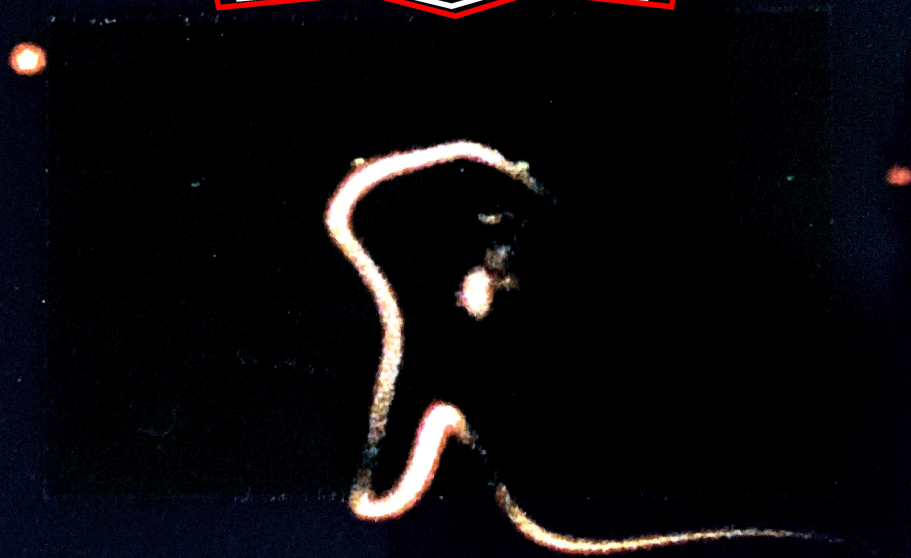


躍動するシラヌイ



1986年9月4日午前4時3分、不知火町西の浦の高台より大島の右側海面(距離10km)から舞い上がる不知火を撮影。

過去の不知火調査においても、不知火の舞い上がる状態が報告撮影されている。

この写真はそれを再確認したと同時に不知火が意識

的に行動したことを証明しており、漁火説の空気レンズ現象などで説明できるものではない。

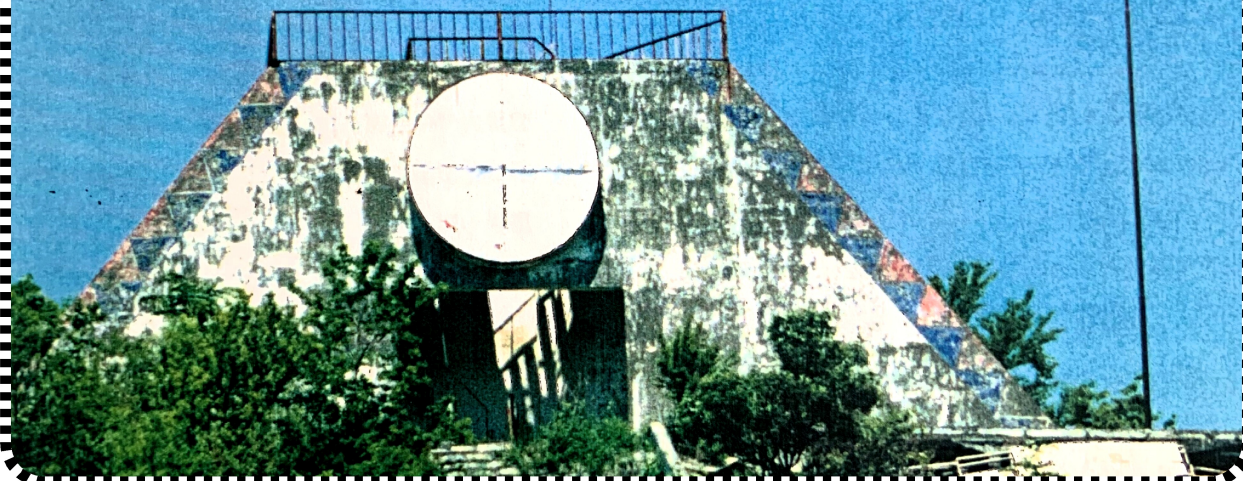
撮影者 Y. Tachibana

ニコンF-3 210mm

F-3.8 60秒

フジカラー400

ハヨピラ上空のUFO



・1991年6月7日 ・11:18am ・ミノルタX7
・135mm ・F11 ・フジカラー400

撮影者 S. Nunokawa

氏族連合体・日本の原住民

『土蜘蛛[クズ・サエキ・ヤツカハギ・鬼・蛇(オロチ)]・エミシ・アイヌ』

人間国土防衛の歴史とアイヌの口承文芸!!

(Ⅱ)

- ① 日本の原住民(土蜘蛛・エミシ・アイヌ)などの死闘の歴史。
- ② アイヌ文化期時代とは。
- ③ アイヌの口承文芸に謡われた「ヒエ」の起源。
- ④ アイヌの口承文芸に謡われた海獣狩猟具の「雌型鉬頭」の起源。
- ⑤ アイヌの口承文芸に謡われたアマッポ(自動発射弓矢)と毒の起源。
- ⑥ アイヌの口承文芸に謡われた祭具イナウ(削りかけ・削り花)の全国的分布。
- ⑦ アイヌ文様と土器(縄文・続縄文)文様・装飾古墳文様の類似性。
- ⑧ 装飾古墳に囲まれた「シラヌイ現象」と「鏡」との考察。
- ⑨ アイヌと奄美大島の女人に伝わる入れ墨の風習。
- ⑩ 形質人類学における「縄文人」「渡来系弥生人」「古墳時代人」「続縄文人」の各人骨と「アイヌ人骨」との比較研究は何を示唆したか。
- ⑪ 分子人類学における「縄文人」「本土日本人(ヤマト人)」「沖縄人(琉球人)」「アイヌ」及び列島周辺の人々のゲノム研究は何を示唆したか。
- ⑫ 日本列島各地に散在するアイヌ語地名について。

前号(VOL. 40-1)では多様な考古学的観点から以下の項目の①～⑤について考察した。

①では、王朝制度体(天皇制)の渡来系殺戮集団ヤマトが、縄文系で氏族連合体を組織して人間国土を形成していた原住民(土蜘蛛・エミシ・アイヌなど)に対する武力侵略を、記紀や風土記(含む逸文)などの資料に基づきその詳細を明らかにして年代・地域・該当者別の一覧表(表1-3. 図14)を作成した。

ヤマトの原住民への武力侵略に対して歴史学者は原住民との地域的小競り合いとして片付

けているようだが、実際には日本国土の制覇と太陽神とのコンタクトから宇宙文化を開花させていた太陽王国の民を絶滅せんがための一方的な侵略戦争であったことが明らかとなってきた。

日本の原住民を代表する“土蜘蛛”との呼称は、堅穴や横穴といった当時の住居スタイルや生活スタイルからヤマトが蔑視の意味合いを込めて名付けたものである。

東国の原住民に限らず近畿(大和地方)の原住民に対してもエミシとの表現が使用されてお

表1 縄文時代(早期・前期・中期・後期・晩期)、擦文時代の

5期+2時代における住居遺跡(含む貝塚遺跡)の使用状況 遺跡総数440

	縄 文 時 代					続縄文時代	擦文時代	遺 跡 数
1	早期	前期	中期	後期	晩期	続縄文	擦文	54
								計54
2		前期	中期	後期	晩期	続縄文	擦文	5
3	早期	前期	中期	後期	晩期	続縄文		18
4	早期	前期	中期	後期	晩期		擦文	13
5	早期	前期	中期	後期		続縄文	擦文	8
6	早期	前期	中期		晩期	続縄文	擦文	4
7	早期	前期		後期	晩期	続縄文	擦文	2
8	早期		中期	後期	晩期	続縄文	擦文	9
								計59
9	早期	前期	中期	後期	晩期			32
10	早期	前期	中期	後期		続縄文		2
11	早期	前期	中期		晩期	続縄文		4
12	早期	前期	中期	後期			擦文	3
13	早期	前期	中期		晩期		擦文	2
14	早期	前期		後期	晩期		擦文	1
15		前期	中期	後期	晩期	続縄文		8
16		前期	中期	後期	晩期		擦文	1
17		前期	中期		晩期	続縄文	擦文	2
18	早期	前期	中期			続縄文	擦文	5
19	早期		中期	後期	晩期	続縄文		8
20	早期		中期	後期		続縄文	擦文	4
21	早期		中期	後期	晩期		擦文	2
22	早期		中期		晩期	続縄文	擦文	6
23	早期		中期		晩期	続縄文	擦文	4
24			中期	後期	晩期	続縄文	擦文	1
								計85
そ の 他								242
※北海道教育庁生涯学習推進局文化財博物館課の北の遺跡案内に基づいて作成								合計440

り、土蜘蛛と蔑視された原住民がアイヌ系である可能性が浮上した。

②では、本州と北海道との考古学的時代区分の相違と北海道では縄文時代から一貫して集団の交代がなされていない事実を明らかにした。

考古学的時代区分に基づくアイヌ文化期の始まりをAD12～13世紀頃(平安時代末～鎌倉時代の初頭)としている。

しかし、北海道内の住居遺跡440遺跡(含む貝塚遺跡)の時代区分【縄文時代(早期・前期・

中期・後期・晩期の5期と続縄文期・擦文期の計7期)ごとの連続的使用性の状況を分析したところ、7期全てに連続使用性の痕跡を示す遺跡は54基、どこか1期が欠落するが6期にその痕跡を示す遺跡は59基、どこか2期が欠落するが5期にその痕跡を示す遺跡は85基であった。

7期、6期、5期を合算すると198基となり、かなりの高確率で遺跡の連続使用性が判明したのである。

つまり、これらの数値は最低でも北海道では殆どの時代区分にアイヌ系民族が居住してい

たことを意味しており、「基本的には大きな集団の交代はおきていない・・・。」「人の集団としては近代まで連続性がある・・・。」との専門家の見解を裏付けたものであり、縄文早期から一貫してアイヌ文化期時代と言えるのであった。

③では、アイヌの“始祖の神”であり“文化神”である「オキクルミカムイ【アエオイナカムイ(伝承神)・カンナカムイ(雷神・竜神)・アイヌラックル(人間の匂いのする神)・ポイヤンペ(英雄神)】がアイヌモシリ(北海道)“に降臨するに至ったその経緯と試練、聖地ハヨピラに降臨後、アイヌに授けた様々な文化の種類と技法、神事や裁判に関する方法などなど。

そして、恩恵に馴れて墮落したアイヌがオキクルミカムイ(以降オキクルミ)をアイヌモシリから去らせるに至った“神徳を汚した三箇条”を明らかにした。

オキクルミが天界の法に抵触することを承知でアイヌのために持参した「ヒエ」に関しては、栽培の可能性が指摘される「縄文ヒエ」と同一であるとみなし、オキクルミの降臨時期を縄文早期末から前期、アイヌモシリから去った時期は縄文中期頃であるとみなした。

ヒエの起源は大陸ではなく「縄文ヒエ」が検出される遺跡の年代から日本・北海道及び北東北に求められるのであった。

④では、アイヌがオキクルミから享受された海獣狩猟文化の一つである「銚の銚頭」に関して考察した。

銚頭には「雄型」と「雌型」があるが、回転する仕組みの雌型の銚頭が検出された遺跡の年代は縄文早期末から前期前半であり、それらの遺跡は主に北海道と北東北に集中している。

従来、石鏃同様に雌型銚頭の起源は大陸に求

められていたが、それは大陸ではなく北日本に求めるべきであり、「縄文ヒエ」の年代とラップすることが判明した。

大型魚や海獣の狩猟には銚頭にトリカブト系(スルク)が塗布されて使用されており、オキクルミとの関係が示唆されている。

⑤では、アイヌの狩猟文化に革命をもたらした自動発射式弓である「仕掛け弓(アマッポ)」と矢毒について考察した。

記録では天武帝(7世紀後半)の時代に機槍としてのアマッポに使用禁止令がでている。

口承文芸ではアマッポ以前の使用と推察される「自動追尾式弓矢と矢毒」について言及しており、アイヌの自動追尾式弓矢への冒涇はオキクルミを去らしめた“神徳を汚した三箇条の一つである。

アマッポが開発された時期は、オキクルミがアイヌモシリを去る前である縄文前期後半から縄文中期頃と推測できた。

このアマッポは北方諸民族のイヨマンテ(熊祭り)における不可欠の道具とされている。

かつてはイヨマンテの儀式において北海道のアイヌは祭壇の中央に三重円に表現したシンタを飾っていた。

オキクルミ或いはシンタは円または多重円(太陽マーク)で表現されることから、成獣時に消滅する可能性が高い小熊の首に認められる自然の太陽マークとイヨマンテの関係を解説した。

イヨマンテにおいて何故に小熊を対象とするのか、それは太陽神オキクルミ及びシンタとイヨマンテの関係を考察しなければ到底理解できない問題なのである。

以上、前号の概要である。

Ⅱでは⑥・⑦・⑧・⑨のテーマに基づいて、専門家がタブー視してきた“アイヌ民族の日本全土の先住性”について考察する。

⑥ アイヌの口承文芸に謡われた祭具イナウ 全国的分布 (削りかけ・削り花)



アイヌ民族の神事や祭事である「カムイノミ」「イチャルパ」「イヨマンテ」「チセノミ」「アシリチュプノミ」などの伝統的儀式に使用する必要不可欠な祭具、或いは儀礼具などに木製造形物としての『イナウ』が在る。

そのイナウとの相似性や類似性が指摘される「削りかけ状木製造形物(以下削りかけ)」が、本州以南の一部地域を除く青森から鹿児島に至る列島全域に分布する。

「削りかけ」の名称や用途は、地域によって多種多様であり、民俗行事に取り入れられながら複雑に展開して現在も続いているが、現状では一部の地域を除きそのほとんどは考古資料館、博物館などに展示・保管されている。

さらには千島、樺太のアイヌ及びユーラシアの北方諸民族や東南アジアの諸民族(ラオス、ベトナム、マレーシア、ボルネオ、インドネシア)などでもイナウ状木製品の存在が確認されている。

イナウ状木製品を北方諸民族であるニブヒ(ギリヤーク)ではイナウ(inau)・ナウ(nau)、ウイльта(オロッコ)ではイルラウ或いはイッラウ(illau)、ナナイではイリアウ(iljau)、オロチョンとオロチではイラウ(ilau)と発音する。

コリヤークの木遇に巻いた聖なる草「ハマニク」もその系統と見られている。

蝦夷生計図説にはアイヌが舳先に「イナヲ立て舟神或いは舟霊を祭る(今本邦船師)」と記されているが、ナーナイ(ナナイ)族【ナーは「土地、地面、国、地元」を表し、ナイは「人、人間」の意味】の「水の神伝説」によると「舟の首に削り屑(イナウ状)を飾る」とのアイヌと似た風俗が存在している。

近代以降、「削りかけ」の研究に先鞭をつけたのは人類学分野の坪井正五郎である。

他にも民族学分野の本山桂川や折口信夫、文化人類学分野の大林太良などがいる。

坪井正五郎は、イナウが和語の「イナホ」(稲穂、折り麻(お)の短縮形とする)の転訛であり、「我々からアイヌに伝えた習俗」であるとの説を唱えた。

一方、本山桂川は、「其の信仰及び習俗の根源は之をアイヌのイナウに求め得る」と述べ、坪井らとは対照的に、アイヌのイナウが和人に移入されたものと捉えている。

民俗学者の柳田國男は、「花とイナウ」において「削りかけとイナウはふたつの地域で偶発的に発生した、連続性のない習俗」とであると論じた。

イナウや削りかけのルーツに関して明瞭な結論は出ていないが、どちらかというともアイヌのイナウよりも、ヤマトの神社信仰に由来す

表2

◎ 削りかけ名称の分類 ◎

	供え物	子宝祈願	五穀豊穡	魔除け
名称	・ケズリバナ、削り花 ・ヒガンバナ、彼岸花 ・山の神のけずりかけ ・夕顔 ・ハナ ・カザリバナ ・ヨネクラバナ ・ヤマバナ ・クルマバナ ・ジュウロクダンバナ ・十二バナ ・十二階バナ ・十六バナ ・エビスノハナ ・ナゲバナ ・エビスの箸 ・オコゼの魚 ・サカグシ ・削り掛け ・セイノカミに供える花 ・ハナマンジュウ	・梵天 (ぼんでん・ボンデコ) ・イワイモーシギ ・祝儀棒 ・ヒョウギ ・初嫁棒 ・嫁つつき棒 ・嫁叩き ・ホデキ棒 ・ハラミバシ ・尻うち棒 ・はらめ棒 ・ハラメン棒 ・ハラメ木 ・シリタタキ棒 ・ゴイワイボウ ・オンマラ ・ゴシнтаイ ・ハナマンジュウ ・花まんじゅう ・シリマンジュウ ・ナレナレ棒 ・ダイノコ	・ケーカキボウ、・カユカキボウ ・削り花、削り掛け ・粥杖、粥柱、カエ柱 ・ナレナレ木、ナレナレ棒 ・カキナレ ・粟穂稗穂、アボ・ヘボ ・アワボ・ヒーボ ・ホダレ ・大根 ・花 ・三段の花 ・カキバナ ・ダイノコ ・柳の箸 ・はらみ箸 ・送り箸 ・小豆粥用箸 ・十三月 ・水口の守り神 ・雷のほうだろ ・イワイボウ ・ハラメ棒	・オマモリガタナ ・カタナ ・鬼の目突 ・福杖 ・香水棒 ・ヤイカガシ ・ハナバシ ・かゆ箸 ・十二月 ・十三月

る「御幣(ごへい・みてぐら)」にルーツを求めているようだ。

そこで、削りかけやイナウ(含む海外のイナウ状木製品)がヤマトの御幣をルーツとしているのか、それとも削りかけや御幣がイナウをルーツとしているのか、アイヌの口頭伝承を文字化した口承文芸や削りかけなどの研究資料を参考にして考察する。

◎イナウの起源◎

口承文芸によると、イナウを含むおよそ民族が固有の慣習、風習と信じているアイヌ文化の一切は始祖神であるオキクルミカムイ(以下オキクルミ)に淵源しているという。

オキクルミはその特徴や偉大な功業から火の神、太陽神、文化神、農耕神、アエオイナカムイ(伝承神)、アイヌラックル(半神半人=人間の匂いのする神)、カンナカムイ(雷神)、ポイヤンペ(英雄神)などと様々に呼称され尊崇されてきたが、今日では殆どのアイヌはオ

キクルミの存在を忘れ去り、火の神を第一義的存在としている。

往古天上界(カントモシリ)では、地上界(アイヌモシリ)の人々が洞窟に住み獣同然の生活を営むことを不憫に思い、地上界の人々の生活環境の改善と教化とを目的に指導者(教師)に相応しい人物の派遣を決定した。

唯一、過酷な試練を乗り越えて修練を積んだオキクルミが一掴みの稗(ヒエ)を持参して地上界のハヨピラへと黄金の航空船「カニシタ」で降臨した。

オキクルミのアイヌへの教化については、『アイヌ文化誌 金田一京助選集Ⅱ』、及び『北海道の伝説 アイヌに文化をさずけたオキクルミ』において、その偉大な功業を次のように語りついでいる。

★アイヌ文化誌 金田一京助選集Ⅱ★

(中略)まず島内のあらゆる魔神(トンチカムイ)を調伏し、また沖からこの島へ上がつ

アイヌ民族の祭具イナウと全国の削りかけ・削り花①



図1 〔北海道〕札幌市豊平河畔
・アシリチェブノミのヌササン
・Aerospace News撮影



図2 〔北海道〕アイヌ民族
・イナウ
・川村カ子トアイヌ記念館所蔵



図3 〔北海道〕アイヌ民族
・ノヤイモシ・平取町立
二風谷・アイヌ文化博物館所蔵



図4



〔北海道〕アイヌ民族
・木幣
・所蔵館(北海道博物館、北海道大学植物園)



図5 〔北海道〕アイヌ民族
・イナウ・川村カ子ト
アイヌ記念館所蔵

て来る魔神を撃退した。そのほか、耕作を教え機織の法を授け、家を建てること、着物を仕立てること、食うべき草の根や薬となるべき食物、ことに角鮫取りに沖に出られるような大舟の造り方や銚(もり)やヤスの用法から、獣を取るに用いる附子矢(ぶしや)という毒矢の毒の製法から、野へ仕掛ける自動自発弓(アマッポ)の造り方などに至るまでみなオキクルミの創意に成るものだという。

さらに進んでオキクルミは神を崇うことを教え、木幣を削って神を祭ること、酒を捧げて神に禱(いの)ること、祭らるべき神々のいわれ、禱るべき詞(ことば)の述べよう、そのほか、病の根源、病を癒すべき祈祷の方法など、いっさいの神事はみなその教えに基づくという。

例えばアイヌの信仰では、神が最も喜ば

れるものは、御酒(古くは稗で酒を造ったという)と、それから『白く輝やく聖なる木幣』であるという。

酒は髭揚篋(イクパスイ)の尖端を濡らしたただけ捧げても神さまの許に届けば盃一杯の酒となり、またただ盃一杯ほどの酒でも神様へ届けば六桶(イワンシントコ)の酒になるという。

木幣は、柳(shushu)、槐(えんじゅ=chi-Kupeni、瑞樹(みずき=otukanni-ni)、谷地樺(やちかんば=punnkau)、榊(かしわ=tun-ni)、檜(なら=pero-ni)、黄蘗(きわだ=shikerpe-ni)の七木を選んで作る。これは、ひとり神様たちの最も喜ぶものであるばかりでなく、魔物(カミアシ)さえも欲しがって始終覗っているものであるという『だから、熊送りの時、小熊を屠って祭る詞の中に白く輝やく聖なる木

アイヌ民族の祭具イナウと全国の削りかけ・削り花②



図6 〔北東北地方〕
・豆ハンジキ
・北海道立総合博物館所蔵

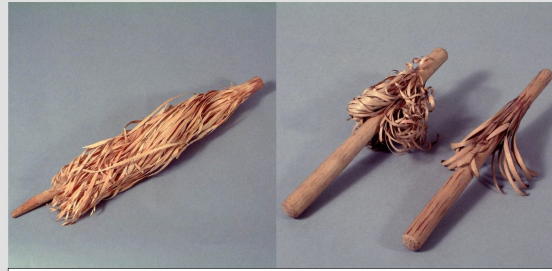


図7 〔青森県〕
・山の神の削りかけ
・北海道立総合博物館所蔵



図8 〔秋田県〕
・初嫁棒
・秋田県立博物館所蔵



図9 〔宮城県〕
・彼岸花
・北海道立総合博物館所蔵



図10 〔宮城県〕大崎市
・ケズリバナ
・堀川 波氏より提供



図11 〔宮城県〕
牡鹿群牡鹿町
・イワイモーシギ・北海道立総合博物館所蔵



図12 〔宮城県〕
牡鹿群牡鹿町
・エーモンギ・北海道立総合博物館所蔵



図13 〔岩手県〕
遠野市
・夕顔
・北海道立総合博物館所蔵

幣の輝すところを一筋に辿ってみちみち魔性のものに盗まるることなく、汝らの天に在す母熊の御霊の所まで安穩に行き着くよう！』という。

なぜなら、魔物でも、かの白く輝やく聖いイナウを手に入れると、その幾十倍恐ろしい魔物になれるからだという—これもみなオキクルミの教えで—それで、今日は酒を造る事が禁制になったけれど、従前は、アイヌは酒を造ることがあれば、必ずまず大いにイナウを削って盛んに神を祭る。

それはなぜかというに、これもオキクルミの教えだ。昔、蝦夷国(アイヌモシリ)が大饑饉に逢った時、オキクルミが蓄えをみな施し尽くして、僅かにあった余りの稗を挙げて六桶(イワンシントコ)の酒に造り「六」はアイヌでは霊数(シークレットナンバーである)大盃になみなみと注いで神窓(ロルン・ブラヤ)の下に立って天神(カントコロカムイ)に祈った。

その祈りの詞には、『我が蝦夷島へ下りて来たその始末、一部始終をすべて最もよく知り抜いている神は、爾(なんじ)在天の神であるゆえ、今イナウを立てて爾在天の神に祈る。

蝦夷島は今、野に一匹の鹿もなく、川に一尾の魚もない。アイヌは今や餓死を待つばかりである。

今後我よりアイヌに誨(おし)えて、以来は酒を造った折は、必ずまずイナウと共に爾在天の神に捧しめ、篤く礼拝させるであろうから、宜しく、鹿(ユク)を領(コロ)する神は鹿を下し、魚(チュプ)を領する神は魚を下ろすように、そして、アイヌどもの饑餓の苦しみを救って下さい！』オキクルミのこの祝詞を、四十雀(エチキキッポ)が伝令して、折しも裁縫をしていた天神(カント・コロ・カムイ)の許へ行って言ったけれども『一ぺんの言葉はきくもんじゃない』と思つて耳も貸しもしなかった。

アイヌ民族の祭具イナウと全国の削りかけ・削り花③



図14 〔宮城県〕大崎市
・ケズリバナ
・堀川 波氏より提供



図15 〔山形県〕東田郡朝日村
・ホダレ
・北海道立総合博物館所蔵

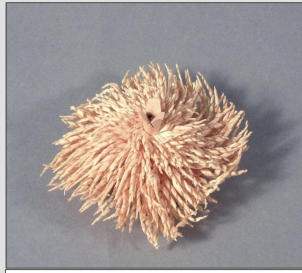


図16 〔山形県〕米沢市
・ハナ
・北海道立総合博物館所蔵

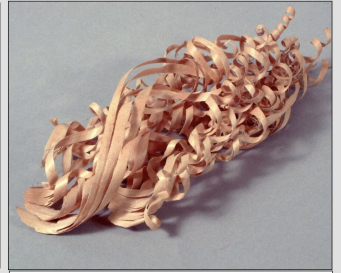


図17 〔山形県〕東田川郡朝日村
・水がめ用ヌサ
・北海道立総合博物館所蔵



図18 〔山形県〕米沢市笹野
・削り花
・堀川 波氏より提供



図19 〔山形県〕米沢市笹野
・削り花
・堀川 波氏より提供



図20 〔群馬県〕
・ケズリバナ
・堀川 波氏より提供

けれども、オキクルミがなおも耳と紋との附いた酒箸(キケ、ウシ、パスイ)を執って熱心に祈るから(すべて酒箸は、人間の詞を神へ伝えるものとなっている)、とうとう天の女神も『そんなに頼むならば』と言って自ら立って盃を受けてその酒を六つの桶へあけた。

天の神々がみな寄って互いに汲んだ。

然るに鹿を領する神と、魚を領する神とは、酒を飲んでも目を開かず、なお怒っている。『アイヌは、いけない。魚を取るにしても昔のアイヌは、まず取り掛かる前には川(ペツ)を統(コロ)ぶる神(カムイ)を拝して掛ったものであるのに、今のアイヌは、川底へ汚らわしいものを投げ込んで顧みないし、獣を獲ってもイナウを立てることを忘れて、剰(あまつさ)え、頭の骨を投げ棄てて置くから、もうアイヌの国には戻らない。』と頑としている。

そこでなお、アイヌの元になる女神ペトルウシマチ(Petru-ush-mat)とチワシェコ

トマツ(Chiwashkot-mat)が、ここぞと一所懸命にいろいろな歌を歌う。

それでも件の二柱の神はなお怒って目を開かずにいる。

やってやってたくさんやると、とうとうに二柱の神も、片目ずつ開けて見て、ついに両眼を開いて笑った。

そして、やっと機嫌を直して言うには、

『では、これからイナウを立てる事を忘れちゃいけない。

我々はイナウを欲しいと思っているのだのに、みなのが、ただ殺しきりにして置くから取り上げたのだ。』と言ったという。

そこで、オキクルミのお陰で以後、また元の通りに魚や獣がこの島にたくさんいるようになった。

それで、それから後オキクルミの詞の通りに、酒でも造った時に、まずぜひともこの神たちに捧げるようにし、また平生イナウを造って神に捧げることは怠らぬ

アイヌ民族の祭具イナウと全国の削りかけ・削り花④



図21
・ハナ
[群馬県]藤岡市金井
・群馬県立歴史博物館所蔵



図22 [群馬県]中之条町六合
・ハナ
・群馬県立歴史博物館所蔵



図23 [群馬県]
・風車
・堀川 波氏より提供



図24 [群馬県]
中之条町
・チデレバナ・群馬
県立歴史博物館所蔵



図25 [群馬県]
上野村乙父
・木バナ・群馬県立
歴史博物館所蔵

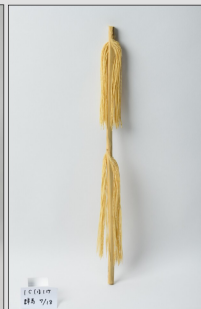


図26 [群馬県]
東吾妻町松谷
・ホダレ・群馬県立
歴史博物館所蔵



図27 [群馬県]
桐生市
・ハナ・群馬県立
歴史博物館所蔵

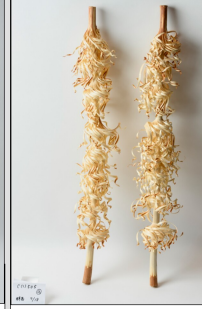


図28 [群馬県]上野
村乙父・ジュウロク
バナ・群馬県立歴史
博物館所蔵



図29 [群馬県]甘楽町
秋畑・ジュウニダン
バナ・群馬県立歴史博
物館所蔵

ようにしているのだと。

で、このオキクルミがアイヌを教え諭したオキクルミ自身の詞、及びオキクルミの教化のいろいろな事柄をその時代の古老が述べた詞おば、すべてそのまま今に片言隻語(せきご)も違えずに(アイヌは、そう思っている)伝えている。

その詞はすべてオイナ(0ina)と呼ばれる。

「古伝」または「聖伝」と訳すべきである。

今前に述べた話もこの聖伝の一つである。みなもとより神話であるが詞になって居て歌うものである。

英雄伝説(ヘルデン・ザーゲ)のユーカラと呼ぶものも歌うものであるが、これに対し、オイナの方は、一々神事、祭事に関する歌であるゆえ、一名カムイ、ユーカラとも称す。神謡または聖歌と訳すべきである。

私は、従来、主に英雄説話のユーカラの採集に骨折っていたので、この神謡(カムイユカラ)の方は、まだほんのついでついでに十四・五篇ほど採録しただけであるが(私以前には、バチラー師が四・五首採録されて『日本亜細亜協会報告』に発表されたものがある、まだまだたくさんあるらしい。



図30 オキクルミカムイ像
平取町ハヨピラ

アイヌ民族の祭具イナウと全国の削りかけ・削り花⑤



一首の長さは、短いもので六・七十句(一句は稀に一語たいていは二・三語)、長いものは二百、三百句或いはそれ以上のも及んでいる。

これによってアイヌの風習の元や、信仰の基礎や、儀式の起源や、その自然観、人生観というようなものが遺憾なく窺える。

今ここには、一首一首の梗概(こうがい)を述べることは避けるが、この歌の完全な蒐集はやがてアイヌの旧約書若しくは古事記のようなものを現出するだろうと思う。

◎北海道の伝説(アイヌに文化を

さずけたオキクルミカムイ)◎

ずっと昔、神様がアイヌモシリ(北海道)を作ったことです。

神様たちが、『それは、それは、緑美し

い山だ』『それは、それは澄んだ美しい流れの川だ』などと、新しくできた、アイヌモシリの話をしていました。

『よし、その国へ行ってみよう』と、勇氣と知恵と力のある、若い神さまのオキクルミは、ひとつかみのヒエの種を手にとすると、下界へ降りていきました。

それは、美しい沙流川が、ゆうゆうと流れている今の平取の辺りでした。

『なるほど、これは、天上で聞いていた話より素晴らしい国だ。この地で自分の力を試してみたい』若い神さまのオキクルミは、山や川の美しさと、そこに住む優しいアイヌの人たちに感激して、いいました。アイヌの人たちは、大変喜びました。

オキクルミは、まず初めに、火のつくり方を教えました。

石と石とをぶつけて火花をつくり、サル

アイヌ民族の祭具イナウと全国の削りかけ・削り花⑥



図38 [静岡県] 葵区野田平
・ダイノコ
・静岡市提供



図39 [長野県] 木曽郡上松町
・セイノカミに供える花
・長野市立博物館所蔵



図40 [長野県] 茅野市玉川
・削り花
・長野市立博物館所蔵



図41 [長野県] 茅野市玉川
・削り花
・長野市立博物館所蔵



図42 [長野県] 佐久市瀬戸
・削り花
・長野市立博物館所蔵



図43 [長野県] 南佐久郡川上村
・けずりかけ
・松本市立博物館所蔵

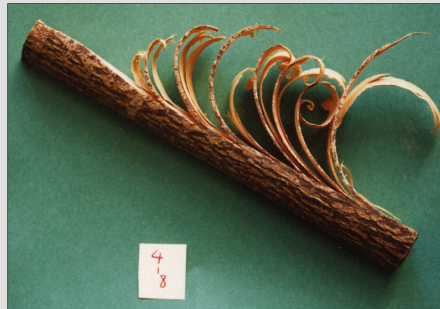


図44 [長野県] 下高井郡山ノ内
・オハナ (削り花)
・松本市立博物館所蔵



図45 [長野県] 南佐久郡川上村
・削りかけ
・松本市立博物館所蔵

ノコシカケを燃やすと炭が出来、火種になるのです。

今まで、山火事でもなければ、火をつくることはできないもの、と思っていたアイヌの人たちは、驚きました。

次にオキクルミは、柱を立て、自由に立って歩くことのできる家の作り方を、教えました。

今までは、三本柱を立てた、竪穴式の家だったので、アイヌの人たちは、家族が気持ちよくすめるようになって大変喜びました。

また、オキクルミは、シカやクマを獲る弓と矢、トリカブトという木の根で作る毒、それにサケやマスの獲り方や道具のことを教えてやりました。

これで、アイヌの人たちは、山や川の獲物を、たくさん獲ることが出来、食べ物

に困ることがなくなりました。

オキクルミは神の国から持ってきた、ひとつかみのヒエの種を、たくさん増やして、国中のアイヌの人たちに分け与えました。

アイヌの人たちは、はじめて、おいしいヒエごはんを食べられるようになりました。

オキクルミは、このヒエを使って、お酒を造ることも教えました。

アイヌの人たちは、おいしいお酒を造ると、ヤナギの木で、イナウを造り、神さまをお祀りしました。

アイヌの人たちは、イナウの造り方も、お祀りの仕方も、オキクルミに教えてもらった通り、立派にやりました。

オキクルミが、『神を大切に祀ると、神々

アイヌ民族の祭具イナウと全国の削りかけ・削り花⑦

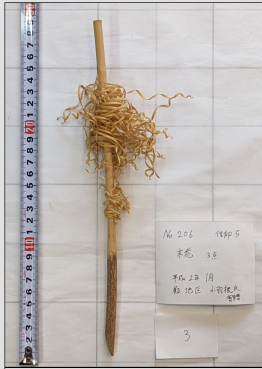


図46

〔長野県〕大桑村
・木花
・大桑村教育委員会提供

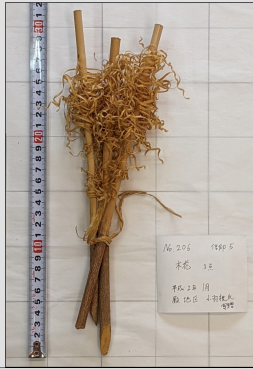


図47〔長野県〕飯田市上村
・ゴイワイボウ
・長野市立博物館所蔵



図48 〔長野県〕木曽郡大桑村
・オハナと十二月
・松本市立博物館所蔵



図49 〔長野県〕南佐久郡川上村大深山地方
・けずりかけ
・松本市立博物館所蔵



図50 〔長野県〕白馬村
・龍の髭
・北海道立総合博物館所蔵

が喜んで、アイヌを守ってくれるのです』
と教えてくれたからです。
オキクルミのおかげで、アイヌの人たちの生活は、たいそう豊かになりました。
『オキクルミカムイ、ありがとうございます』『オキクルミカムイ、いつまでも、このアイヌモシリにいてください』……………。

◎その他のイナウに関する伝承◎

★沙流川の伝承★

①「聖伝4アエオイナの神の自叙」（平賀エアノア語り）

天界からキケチノエイナウ（男の幣神）・キケパラセイナウ（女の幣神）がアエオイナの神の元に下ろされ、人間に与え人間の仕事として教えたが、雲の関の彼方に巨魔の神がいて奪われたので後を追って取り戻しに行く。（アイヌの叙事詩神

謡・聖伝の研究）

②柳がイナウネニ（イナウを作る木）になったわけ」

昔、コタンカラカムイ（国造りの神）が、この人間の国土を造るために神の国から降りてこられ、国土を造り終えて神の国へ帰られるとき、アイヌモシリで用いた物を神の国へ持ち帰ることはできないので食事に使っていた箸を大地に突きさして帰った。

その箸に根が生えて一本の木になりました。

それが柳なのです。

この柳の木を削って美しいイナウを作り、神様にあげるようになった。

（アイヌの民具 刊行運動委員会）

★静内の伝承★

アイヌ民族の祭具イナウと全国の削りかけ・削り花⑧



図51 〔新潟県〕
・嫁叩き棒
・北海道立総合博物館所蔵



図52〔新潟県〕中魚沼郡津南町
・削りかけ
・北海道立総合博物館所蔵



図53 〔新潟県〕山北町雷
・ほうだろ
・新潟県歴史博物館所蔵



図54 〔新潟県〕中魚沼郡
津南町・削りかけ
・北海道立総合博物館所蔵



図55 〔岐阜県〕飛騨
高山・祝い棒
・Aerospace News保管

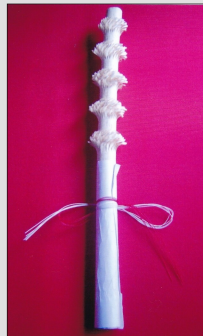


図56 〔石川県〕
・祝い棒
・石川県
・石川県神社所蔵



図57 〔奈良県〕十津川村大
字小坪瀬
・ケズリバナ
・十津川村教育委員会提供



図58 〔奈良県〕
・山の神(ケズリバナ)
・十津川村教育委員会提供



図59 〔奈良県〕吉野郡上
北山村
・ケズリバナ
・奈良県立民俗博物館所蔵



図60 〔石川県〕
・輪島市
・デーナガボウ
・輪島市教育委員会提供

①「起源や由来を説く昔話」（葛野辰次郎筆録）

削り掛けを扱った男性の木幣と削り掛けをばらつかせた女性の木幣の夫婦の木幣をアイヌラックルに授けて下界に降下させた。（北海道教育庁生涯学習部文化課編2001:89-92）

②「イナウユーカラ」（森崎藤吉語り、増田聞き書き）

昔々神がこの国を造った時、国がきれいに出来たので天国に帰るといふ時に、途中で鋤を置き忘れたことに気がついて振り返ってみると、そこには柳の木が生えていた。

国はひらけたが何もないアイヌの人たちに、神は柳をさずけてこれで御幣を作るようにと教えたのでした。

ところが多くの悪魔どもは、この御幣をアイヌの人たちが持つと悪魔どもは生活

できなくなるので、この御幣を取り上げて岩屋に隠してしまった。これを知った神が、これは大変とばかりに悪魔と戦う。

（アイヌのふるさとに歌を求めて）

③「ふうふのイナウがさらわれた」

天界から夫婦のイナウが下されたが、悪魔がそれを奪ってしまった。

人間を気の毒に思ったアイヌラックルはそれを取り戻すために闘う。

（公益財団法人アイヌ民俗文化財団 オルシペスウオプ5）

◎フォースフィールドに

包まれる「光りの神」◎

以上、口承文芸では、イナウを削るにあたっての木の選定やイナウの用途についても詳細に言及しており、アイヌの生活にとってイナウが必要不可欠な存在であることと、オキクルミとイナウが不可分の関係にあり、イナウ

アイヌ民族の祭具イナウと全国の削りかけ・削り花⑨

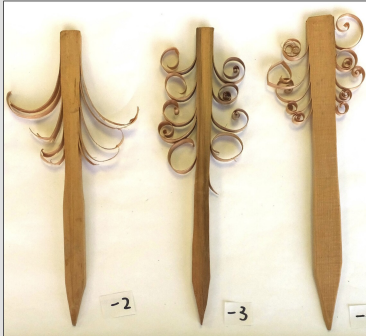


図61 〔奈良県〕吉野郡下北山村
・ケズリバナ
・奈良県立民俗博物館所蔵



図62 〔福岡県〕太宰府市
・大宰府天満宮の木うそ
・福岡市博物館所蔵



図63 〔大分県〕
・鬼ヤライ
・北海道立総合博物館所蔵



図64 〔長崎県〕平戸市
・道祖神
・北海道立総合博物館所蔵



図65 〔大分県〕国東市
・香水棒
・Aerospace News保管



図66 左〔熊本県〕天草市本町・ハラメンボウ
右〔熊本県〕天草市久玉町・ハナマンジュウ
・熊本県博物館ネットワークセンター所有

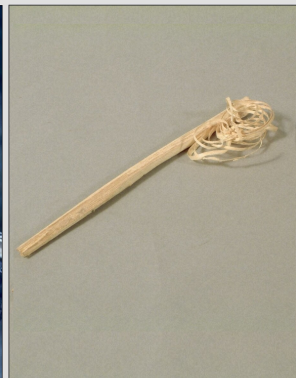


図67 〔鹿児島県〕谷山市
・ケズリカケ
・北海道立総合博物館所蔵



図68 〔鹿児島県〕大口市
・ハラメ棒
・北海道立総合博物館所蔵

はオキクルミをルーツにしていることが明示されている。

イナウは北海道では主にヤナギやミズキ、キハダなどの生木をイナウケマキリ(イナウを作る小刀)で薄く削り、房状(キケ)に加工する。

それが人間の祈願や感謝の言葉を神に伝え、反対に神々の意向を人間に伝えるという仲介者であり、メッセンジャー的役割を担っているのである。

また良き神々に捧げる最も相応しい物であると同時に、神への捧物を運ぶ乗り物であったり、家を守る守護神であったり、魔物や病気から人々を守る魔除けとしての役割も果たしている。

神に感謝を捧げるカムイノミにおいては、イナウの他にイクパスイ(奉酒箸)と呼ばれる木製のヘラが用いられ、その先端を酒に浸して

滴を火やイナウに振りかけてカムイへの祈願を行う。

儀式では、どのカムイに祈る場合でも最初に最も重要で中心的存在とされる“火の神(アペフチカムイ)”に祈願するが、火の神には他にもチランケピト(天から降ろされた神)、イレスフチ(人を育てる神)、モシリコロフチ(国土を持つ神)などの別称がある。

火の神の起源によると、国造りの神(コタン・カラ・カムイ)が国造りの為に最初に人間の世界(アイヌ・モシリ)に下ろした神であり、沙流川では火の神がアイヌモシリを守る神として一番最初にカムイモシリから天降った神だと語る神謡がある(久保寺, 1977)

他にも沙流川には国造りの神が人間に火を授ける伝承があり、火の神の起源が火を起こすことと結びついて語られているが、「アイヌ

アイヌ民族の祭具イナウと全国の削りかけ・削り花⑩



図69

〔熊本県〕天草市本町

- ・ナレナレ木
- ・天草市立本渡歴史民俗資料館所蔵



図70 〔熊本県〕人吉市

- ・もぐらうち
- ・北海道立総合博物館所蔵



図71〔鹿児島県〕熊毛郡屋久町

- ・もぐらうち
- ・北海道立総合博物館所蔵

イナウ奉納額



図72

〔石川県〕輪島市

- ・天社丸イナウ奉納額 輪島指定文化財
- ・若宮八幡神社所蔵 (撮影Aerospace News)



図73 〔石川県〕

- ・藤原神社イナウ奉納額
- ・石川県立歴史博物館提供

聖典「カムイオイナ」を参考にすると、異なる解釈が浮上する。

アイヌ聖典 カムイオイナ

裾の焦げたる 厚司(と)
 縁の焦げたる 兜(とを)
 我に與へけれ ば
 裾の焦げたる 厚司を
 我が着物の上へ打襲ね、
 縁の焦げたる 兜の
 兜の 紐の緒
 われみづから、
 端の焦げたる 鞘、
 それへはまれる 實刀を
 われ自ら鐔元まで
 ぐっと差す。

オイナカムイ(アイヌラックル或いはオキクルミ)が焼け焦げた厚司や兜、刀を身に着ける描写の引用である。

通常「焦げる」のアイヌ語は、ouhui又はou-

huy「であるが、より詳細なアイヌ語辞書では「焦げる」を「裾のほうから炎が燃え立つ」とリアルに表現する。

だが、実際に燃え上がる厚司や兜、刀を直接身に着けるとは考えにくく、炎との描写は特殊エネルギーであるフォースフィールド(力場)に覆われた状態の表現と推測される。

そこで、フォースフィールドに関連する事例を紹介する。

- ①オキクルミとは「輝く衣を着る者」との意味である。
- ②オイナカムイは「霧のようなものに包まれてよく見えない」という。
- ③神が造った金のシントの中に「雲霧の小人」(幼少期のオイナカムイ)が座していた。
- ④バイブルの「出エジプト記」には「ときに主の使いは、芝の中の炎のうちに彼に現れた。彼が見ると、「しばは火に燃えている

アイヌ聖典

神傳〔カムイ オイナkamui Oina〕〔一〕

カムイカッチャシ
イレ ス チャシ
チャシ ペンノキ
チャシ パンノキ
トカプ チュプ ノカ
チエヌイエカラ
クルカシケ
ツ ペケツ チュプ キ
レ ペケツ チュプ キ
チオエロシキ
チャシ コトロ
ミーケ パイエ
トムマ パイ
チャシ オンナイ
イレ ス サポ
イエピリカクル
レシパ カネ
イレ ス サポ
クルカシケ
ツ ペケツ チュプ キ
レ ペケツ チュプ キ
チオエロシキ

イレ ス チセ
ソイ シリカツ
アヤ IAM キレ
ノキウン クニ
ピラン カニ
チコエカイパ
ツペケツチュプ キ
レペケツチュプ キ
チオエロシキ
クルカシケ
ミーケ アラパ
トンマ アラパ
アンラマス
アウエスイエ

イレ ス サポ
シルイ タ アラパ
スツ ケツシ
サナサンケ
オンナイケ ワ
カムイ コソソデ
チエヌイエカラ
クル カシケ
トムマ パイエ

Kamuikat chashi
iresu chashi
chashi pennoki
chashi pannoki
tokapchup noka
chienuyekar
kurkashike
tu peket chupki
re peket chupki
chioeroshki
chashi kotor
mike pye
tomma paye
Chashi onnai
iresu snpo
iepirkakur
reshpa kane
Iresu sapo
kurkashike
tu peket chupki
re peket chupki
chioeroshki

iresu chise
soi shir katu
aya iamkire
Nokiun kuni
piran kani
chiko kaipa
Tu peket chupki
re peket chupki
chioeroshki
kurkashike
miko arpa
tomma arpa
arramasu
awesuye

iresu sapo
shiruita arpa
sut ketushi
sanasanke
onnaike wa
kamui kosonde
chienuyekar
kurkashike
tomma paye

神の工の山城の
我を育てし山城の、
山城の東の軒
山城の西の軒、
日輪の像を
ゑがき、
そのおもて
二重の明光
三重の明光
差し延へて
山城の際
照りわたり
輝きわたる。
山城の内に
養姉
我を克くかしづきて
養ひ育て居たり。
養姉
その身さへ
二重の明光
三重の明光
差し延へて

我が育ちし家の
戸外のたゞずまひを
初めて見る
草屋の葺そぎには
金の平金
を折り被せ
二重のひかり
三重のひかり
差し延へ、
そのおもて
輝りわたり、
輝きわたる、
よろしきかな
われ感動す。

養姉
奥の寝所に行き
祖母の賓囊を
取り出し、
なかより
神衣
縫ひ出したる、
そのおもて
輝き渡り、

エムコ クス
イレス サポ
アイヌ カッ ネ
ヌカレアイカブ

emko kusu
iresu sapo
ainu kat ne
nukar eaikap

これが ため
養 姉は
人の 形 成しては
見え がたし。

ヤイカウンノ
イキコロカイキ
ルアン ピト ネ
ルアン カムイ ネ
アネヤイラム
ソイワサムクル
アエソイエネ
オツカムイクル
オレカムイクル
アエシクルカサム
オツテ カネ
アユブ ケフミ
アシツラレ
コタヌマケ
モシルマケ
エカンナユカラ

Yaikaunno
ikikorkaiki
ruan pito ne
ruan kamui ne
aneyairamu
Soiwasamkuru
aesoene
Otukamuikur
orekamuiKur
aeshikurkasam
ott kane
Ayupkehumi
ashiturare
kotanumake
moshirumake
ekannayukar

わがみ
ながら
昇天の 霊 の如く
昇天の 神 の如く
思はれたり。
戸外へ立ち出
我出で立つ。
二重の雲
三重の雲
おのが身のうへに
棚引きよせ つゝ
わが激しき音
われ我身と共に伴ひゆく
村々相くだけ
國々相くだけ
むとする如し。

ラポクケタ
カムイニシ コトロ
コフムマッキ
ニシカン トリ
ニシカン チカブ
シパセカムイ
アコン ロルソペ
エシウトトツケ
テクサムカシ
カニ シンタ
カムイカラ シンタ
オンナイケヘ
ウララ ポナイヌ
ウララ ポイシサム
チエロクテカラ

Rapokketa
kamuinish kotor
kohuummatki
nishkan tori
nishkan chikap
shipasekamui
akon rorumpe
eshiuototke
Teksamkashi
kani shinta
kamuikar shinta
onnaikehe
urar pon ainu
urar poi shisam
chierokit kar

折しもあれ
天空の 際に
殷々たる響おこり
天津鳥
天津禽
まことの重さ神
わが たゝかひ
へ舞ひ降る。
そのすぐそばに
金の 神駕の
神工の 神駕の
その内に
雲霧の 少 人
雲霧の 少 和人
坐して在り。

アラキ アイネ
イレス チャシ
チャシ タブカ
コシンタ アツテ
カムイ イタク ハウ
ナイコサンパ
ホシキエカブ
イタカ ロキ
ネイケフイケ
ホッパ ハエ
オアラリサム

arki aine
iresu chashi
chashi tapka
koshinta atte
kamui itak hau
naikosampa
hoshikiekap
itaka roki
neikehuike
hoppa hawe
oararisam

來り來り て
我を育つる 山城
山城の 眞上^{まへ}に
神駕を 停めて
神の詞の 聲
鏘然として鳴響き
さきに來し神の
言ひたりけること
どこひとつも
遺としたる ことも
更になし。

のに、そのしばはなくならなかった”
⑤回転しながら”燃えているかの如く見える
”「不知火」は燃え尽きない。

アイヌ聖典ではオイナカムイ(オキクルミ)を
”光の神(tomma kamuy)” ”光明・光輝の神(chupki kamuy)” と呼称している。

その表現がいつの頃からか”光の神(tommak-amuy)”から”火の神(アペフチカムイ)”へと置き換わっているのである。

おそらくアイヌ民族の信仰において”全てのものに魂或いはカムイが宿っている”とするアミニズム的発想から生じた民族の墮落と無関係ではなさそうだ。

もう一つ、太陽神として”日の神(Tokapchurp kamuy)”の性格も有している。

そうであるなら、神事や祭事において、最も重要且つ中心的位置を占めるカムイの名称は”アペフチカムイ”から”トンマカムイ或いはチュプキカムイ”に改めなければならないのではないだろうか。

口承文芸や伝承では「イナウは元来天から下された」、或いは「天から天下った文化英雄神によってもたらされた」という共通の内容が多く存在する。

文化英雄神とは、カムイ・カラ・シンタ(神の・造れる・航空船=UFO)に搭乗して宇宙から平取のハヨピラの丘に天下ったオキクル

ミであることは言うまでもなく、アイヌを人間性復活の道へと教化して多くの文化的技法を授けた偉大なカムイのことである。

「アイヌ聖典」に曰く、ハヨピラの居城に掲げられた”二重の明光” ”三重の明光”としての太陽円盤マーク(太陽マーク)が燦然と輝き、同様の文様がオキクルミの神衣にも縫い出され輝いていたという。

掲げた太陽マークと万民に恩恵をもたらす太陽に匹敵したその偉大な功業からオキクルミを太陽神、その搭乗機であるシンタを太陽円盤とアイヌは尊崇したのである。

宗教学者であり民俗学者であるミルチャ・エリアーデは、太陽神(天空神)について次のように述べている。

「宇宙の創造者で、大地の豊饒を保証する(天空が注ぎだす雨のために)天空神への信仰は、ほとんど普遍的なことである。このような存在者は、無限の予知と知恵とをそなえており、氏族の道德律やしばしばその祭儀までも、この存在者が地上に短期間滞在している間に制定したものである。

そして律法を守るかどうかを監視していて、もしそれに違反するものがあれば、雷で打つのである。」

オキクルミの文化的技法他

文化的技法として【火の使用方法、耕作の方法、魚と肉の調理方法、酒の造り方、機の織り方、着物の仕立て方、家の建て方、丸木舟の造り方、漁獵の方法(鉾・ヤスの製造)、狩獵の方法、毒矢である附子矢(毒矢)や自動自発弓の製法及び使用方法】などを教え、食人種の習慣を改めるよう警告した。神事に関することとして【イナウ(ヌサ・削りかけ)の製法と神の祭り方(ヌササン)、酒を捧げた神への祈り方、祭られるべき神々のいわれ、祈詩の述べ方、

病を癒すべき祈祷の方法などを伝授】した。さらには【挨拶、談判、裁判の方法や祭唄、恋歌、アイヌの歌・結婚・遊び、男の造る物、女の造る物なども教えた】。アイヌはオキクルミ在世の世を黄金時代としているが、時が流れるにつれオキクルミの神徳を汚し墮落した。後年、オキクルミはアイヌに愛想を尽かしてアイヌモシリから隣国、或いはカントモシリへと帰還した。



図74 室蘭沖 太平洋上を飛ぶUF09機編隊
イタンキ浜付近を車で走行中の女性がカメラに収めたもの

※太陽と天空神 エリアード著作集 1986

「イナウを作って儀礼を行うことは人間の義務である」とアイヌに教示したオキクルミの宇宙への帰還に際し「平取本町の向かいの高台に削りかけのついたノヤイモシと呼ばれるイナウを留守を守る神として造り置いていった」との伝承が残っている。

イナウの造形の構成は「ヌサ・タクサ・エブス」の三種が1つになって形成されるが、ヌサは削りかけの棒状の部材を指し、神によって特定の樹種を好み形もそれを贈る神や目的によって様々で、イナウの性別や格式は大きさや形状によって表されるという。

この様々なイナウの中には「火の神に捧げるイナウ・家の守護神・宝壇のイナウなどがあるが、オキクルミに捧げるイナウには太陽(神)を表す輪をあしらったものが捧げられている。

また刻印が付けられたものもあって、刻印には神の印、太陽の印(円)、家の印、器物の所有者を表す個人の印があり、刻印は送り主や受け取り手を表している。

空知、近文では火の神に捧げるイナウには頭部を廻るように6つ刻印をつけるものがあるが、「6(イワン)」という数字に関しては他にもイナウの幹のどちらかの側に6つの独特の削り掛けをもっているものは非常に大事にされているという。

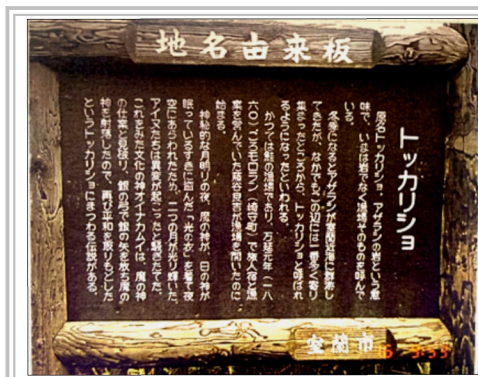


図75 トッカリシヨの看板
北海道室蘭市母恋

アイヌにとって「6」という数字は聖典や伝承において多く用いられている特別な霊数(シークレットナンバー)であり、神聖で完全とされる「6」はオキクルミを象徴した数字なのである。

◎北方諸民族の文化と

アイヌ文化の類似性◎

北海道室蘭には、縄文晩期(旧約の出エジプト記の時代)の彗星の異常接近による宇宙的動乱の発生に際して、アイヌを救済したオキクルミの活躍を物語る『射日神話』を「トッカリシヨ伝承」「アトカニ伝承」として今日に伝えており、その隣にはイタンキ浜がある。

イタンキとは「お椀」を意味するアイヌ語であるが、地元のフチ(お婆さん)によると、イタンキには「伏せたお椀が降りてきた」との伝承が残っているという。

1966年11月、そのフチの話を彷彿とさせるかのような白銀に輝く9機のUFOがイタンキ浜付近に出現、それが見事に撮影された。

一方、北方の諸民族であるニブフ、ウリチ、オロチ、ナーナイ、ネギダル、ウデヘ(ウデゲ)などにはアイヌとの類似文化(イオマンテ、イナウ状木製品、狩猟、漁撈、民族衣装の文様)が多く存在する。

加えて「射日神話」も存在し、宇宙的動乱の発生からトナカイを操りソリに乗る英雄神で



あり文化神でもあるハダウ(別名ホダイ、ハダイ、カドー)が諸民族を救済したと伝承している。(本誌2016-11 VOL33-1)。

ハダウはスティック(棒状)を使用してトナカイを操る。

アイヌの英雄神ポイヤンペもまたハダウ同様シンタ(航空船)のオペレートに際してバチと呼ぶスティックを使用する。

アムール流域の少数民族の聖地とされるロシア(シカチ・アリャン)のトナカイの岩絵には見事な三重の太陽マークが刻まれている。

またモンゴルの地域には、ストーンサークルの中心部に立石(メンヒル)を配置した“鹿石”が550本程確認されており、朱が施された天空への飛翔を意味する鹿石の下部には鹿(トナカイ)を、上部にはU F Oを意味する太陽マークが刻まれている。

太陽円盤を円文・多重円文で描くのは、古代

日本の原住民たるアイヌにほぼ限定される独特の表現技法である。

北方諸民族との文化の類似性、及び射日神話、スティックや太陽マークの傍証などからハダウとオキクルミとは同一人物である可能性が指摘される。

となると、トナカイやソリはシンタ(航空船)に該当するのではないだろうか。

呼称が類似する北方諸民族のイナウ状木製品に関しては、オキクルミによる直接指導と、北海道アイヌとのコンタクトによる二通りの伝播のケースがあると考えられるのであった。

◎オキクルミの降臨時期が

示唆するイナウ文化の始まり◎

オキクルミの降臨時期を明らかにすることはとりもなおさずイナウ文化開始時期の特定に繋がるのである。



そこで、アイヌの代表的食料であり、ドブ酒の原料となるオキクルミが携えてきた天上の「ヒエ」と、狩猟に威力を発揮する銚の先端に取り付け獲物に致命傷を負わせる回転銚の「銚頭」などの考古学的見地からオキクルミの降臨時期を特定する。

尚、詳細については、本誌（2023-6 VOL. 40-1）を参照されたい。

ヒエ属種子の最古の時期特定と栽培化（ドメスティケーション）については、那須浩郎（2018）の「縄文時代の植物のドメスティケーション」を参考にした。

「ヒエはイネ科キビ連Paniceaeの雑穀である。祖先野生種はイヌビエEchinochloa Crus-galliとされており、日本列島や東アジアに広く分布している。同じイネ科キビ連の雑穀であるアワとキビは、中国黄河流域で10,000～8,000年前頃にドメスティケーションされ、黄河流域の雑穀農耕社会の基礎となった（Lu et al. 2009；Zhao, 2011）。

同じように日本列島でも縄文時代に野生のイヌビエのドメスティケーションが起きていたとしたら、縄文時代でもヒエを主体とした雑穀農耕社会が存在してもよさそうであるが、そうはならなかった。

イヌビエとヒエを含むヒエ属種子の最古の記録は、これまでのところ、縄文早期の北海道渡島半島、中野遺跡で見ついている（図2. 付録S3）。炭化種子（穎果）のサイズ変化を長さ×幅の積で比較すると、縄文早期の資料はまだ小さく、現在の野生種のイヌビエと同じ程度である。

ところが、4,700年前頃、縄文中期頃に現在の野生種の上限值を超える炭化種子が突如現れる。



図78 ヒエの穂
（平取町立二風谷アイヌ文化博物館所蔵）

これを発見したCrawford（1983）は、北海道・渡島半島南東部の亀田半島遺跡群において、日本で初めてフローテーション法を導入し、縄文時代前期から中期にかけてヒエ属の種子が大型化していることを見出し、ヒエのドメスティケーションが起きていた可能性を始めて指摘した。

その後、吉崎晶一は、北海道や東北部の遺跡にフローテーション法による炭化種子の分析を精力的に進め、イヌビエよりも丸みを帯びた種子を多数見出し「縄文ヒエ」と名付け、その栽培の可能性を指摘している（吉崎1997a, 2003）。

最近是小畑・真澄（2013）が三内丸山遺跡の円筒下層式の土器片（縄文時代前期後半）から大型のヒエ属有ふ果（果実）の圧痕を検出しており、さらに北海道渡島半島の館崎遺跡でも同時期の土器から大量のヒエ属有ふ果の圧痕が検出されている（小畑, 2017）。

このようにヒエ属の種子は、少なくとも北海道渡島半島から東北北部の円筒式土器文化圏（渡辺, 1982）において縄文時代前期～中期にかけて大型化していた可能性がある。

最近の炭素14年代の合計確率分布 (Summed probability distribution of 14C dates)を用いた人口推定(Crema et al. 2016)では、青森では縄文前期頃、北海道では縄文時代中期頃に人口の増加が見られており、ヒエ属種子の資料数の増加と大型種子の出現時期と一致している(図2)。

しかしながら、縄文時代後期以降、平安時代まではヒエ属の大型種子がみつかっておらず、縄文時代を通して大型種子が継続した様子は見られない。

椿坂がまとめたヒエの詳細なサイズデータによれば(椿坂, 2007)、ヒエ属種子が、現代の栽培種と同程度の大きさになり、その出現頻度が定着するのは、およそ1,000年前の平安時代後半頃である(図2付録3)。

興味深いことにこの時期に朝鮮半島北西部、中国大陸東北部、沿海州南部でも大型のヒエ属種子の利用が始まる(Zhao, 2016)。東北アジアのどこかの地域で大型化したヒエが一気に各地に拡散した可能性がある。」

北海道福島町の館崎遺跡では、縄文時代前期～中期のヒエ属が多量に検出されている。

縄文早期に出現したヒエ属の種子は、前期に

多少大型化し、中期にはサイズがさらに大型化した「縄文ヒエ」が登場するがその期間は短く、中期後半には再び早期の大きさに逆戻りしている。

これらの状況から以下のことが理解される。

- ① 縄文早期或いは前期にヒエの種子を携えたオキクルミが降臨する。
- ② 縄文中期中葉、ヒエの種子が大型化の様相を呈する。
- ③ オキクルミ指導の下アイヌによるヒエの本格的ドメスティケーションが開始される。
- ④ 縄文中期後半或いは後期初頭、何故かサイズは小型化し、ヒエのドメスティケーションは終了する。
- ⑤ アイヌの墮落(不敬)にオキクルミが怒り帰還、もしくは他国へと移る。
- ⑥ 遂にヒエ属の種子はオキクルミ在世中のサイズに戻ることはなく、そのサイズに戻るのは約1,000年前の平安時代まで待たなければならなかった。

考古学的には、ヒエ属の種子の最古の出現時期は縄文早期末～同前期で最古の出現地域は北海道渡島半島である。

ということは、イナウ文化の開始時期もヒエが出現する縄文早期末～同前期とほぼ同時期と見なすことができるのではないだろうか。

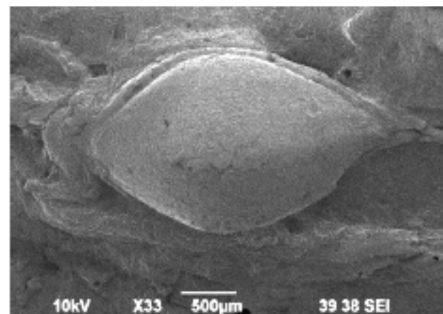
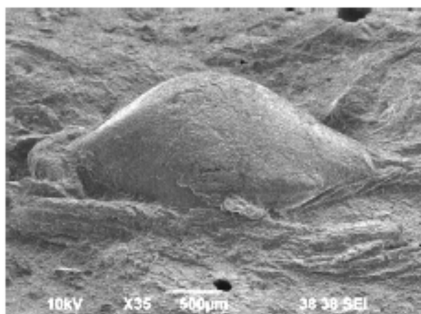


図79 土器に残ったヒエの圧痕画像

遺跡名：館崎遺跡 出土場所：北海道福島町 年代：縄文時代前期～中期(約5,000～4,500年前)
画像： 熊本大学小畑研究室提供

表3 S3 過去10, 000年間のヒエ属穎果のサイズ(長さ×幅)変化 データの詳細																		
遺跡名	地域	時期	炭素年代 最大値 (calBP)	炭素年代 最小値 (calBP)	炭素年代 中央値 (calBP)	個数	長さ 平均 (mm)	長さ SD (mm)	幅 平均 (mm)	幅 SD (mm)	厚さ 平均 (mm)	厚さ SD (mm)	長さ×幅 平均 (mm ²)	長さ×幅 SD (mm ²)	長さ／幅 平均	長さ／幅 SD	文献	
中野B	北海道, 函館市	縄文早期	9136	8545	8841	10	1.35	0.21	1.14	0.15	0.56	0.05	1.56	0.43	1.18	0.09	吉崎 (1997b)	
石倉貝塚	北海道, 函館市	縄文前期初頭	6950	6350	6650	1	1.5		1.05		0.5		1.58		1.43		椿坂 (2007)	
ハマナス野	北海道, 南茅部町	縄文前期	5650	5350	5500	147	1.50		1.20				1.80		1.25		Crawford (1983)	
ハマナス野	北海道, 南茅部町	縄文前期末	5650	5350	5500	1	1.4		1.05		0.55		1.47		1.33		椿坂 (2007)	
ブゴッペ貝塚	北海道, 余市町	縄文前期末－中期末	5650	4550	5100	2	1.25		1.05		0.53		1.31		1.19		椿坂 (2007)	
鳴川右岸	北海道, 七飯町	縄文中期中葉	5050	4850	4950	1	1.6		1.25		0.75		2.00		1.28		椿坂 (2007)	
大船C	北海道, 南茅部町	縄文中期	5050	4550	4800	2	1.83	0.04	1.48	0.18	0.78	0.18	2.69	0.27	1.25	0.17	吉崎・椿坂(1998a)	
大船C	北海道, 南茅部町	縄文中期中葉－末	5050	4550	4800	3	1.73		1.38		0.78		2.39		1.25		椿坂 (2007)	
臼尻B	北海道, 南茅部町	縄文中期	4850	4550	4700	182	1.70		1.30				2.21		1.31		Crawford (1983)	
臼尻B	北海道, 南茅部町	縄文中期末	4850	4550	4700	4	1.36		1.06		0.63		1.44		1.28		椿坂 (2007)	
野場5	青森県, 階上町	縄文中期後半－後期初頭	5050	4150	4600	1	1.45		1.05		0.55		1.52		1.38		椿坂 (2007)	
富ノ沢 (2)	青森県, 六ヶ所村	縄文中期	4521	3990	4256	39	1.41	0.11	1.16	0.11			1.64	0.23	1.22	0.11	住田ほか (2008)	
富ノ沢 (2)	青森県, 六ヶ所村	縄文中期	4521	3990	4256	50	1.47	0.14	1.14	0.10	0.63	0.10	1.69	0.28	1.29	0.09	吉崎・椿坂(1992)	
八木B	北海道, 南茅部町	縄文後期	4550	3350	3950	2	1.28		1.03		0.5		1.32		1.24		椿坂 (2007)	
キウス4 R地区	北海道, 千歳市	縄文後期	3650	3350	3500	50	1.35	0.15	1.044	0.09	0.619	0.09	1.42	0.26	1.30	0.12	吉崎・椿坂(1998b)	
キウス4 R地区2	北海道, 千歳市	縄文後期後葉	3650	3350	3500	30	1.38		1.07		0.67		1.48		1.29		椿坂 (2007)	
キウス4遺跡	北海道, 千歳市	縄文後期後葉	3650	3350	3500	50	1.4		1.1		0.66		1.54		1.27		椿坂 (2007)	
八幡	青森県, 八戸市	弥生時代前期?	2750	2400	2575	8	1.43		1.17		0.69		1.67		1.22		椿坂 (2007)	
H-317	北海道, 札幌市	続縄文時代初頭	2450	1850	2150	50	1.09		0.81		0.43		0.88		1.35		椿坂 (2007)	
H-317	北海道, 札幌市	続縄文時代初頭	2450	1850	2150	50	1.34		1.01		0.53		1.35		1.33		椿坂 (2007)	
青苗B	北海道, 奥尻町	続縄文時代初頭－前葉	2450	1700	2075	1	1.5		1.3		0.7		1.95		1.15		椿坂 (2007)	
K435 第2次調査	北海道, 札幌市	続縄文時代	2450	1350	1900	3	1.47		1.1		0.42		1.62		1.34		椿坂 (2007)	
茂別 (H-9)	北海道, 上磯町	続縄文	1894	1628	1761	50	1.472	0.13	1.179	0.09	0.694	0.10	1.74	0.24	1.25	0.11	吉崎・椿坂(1997)	
K39 第8次調査	北海道, 札幌市	擦文文化前期	1350	1050	1200	25	1.20		0.89		0.53		1.07		1.35		椿坂 (2007)	
山元 (3)	青森県, 浪岡町	平安時代(9世紀末)	1100	1150	1125	8	1.63		1.22		0.7		1.99		1.34		椿坂 (2007)	
有戸島井平(4)	青森県, 野辺地町	平安時代(9世紀末)	1100	1150	1125	1	1.50		1.35		0.8		2.03		1.11		椿坂 (2007)	
ユカンボシC2遺跡群	北海道, 千歳市	擦文文化(9世紀)	1150	1050	1100	24	1.51		1.35		0.87		2.04		1.12		椿坂 (2007)	
K39 第6次調査	北海道, 札幌市	擦文文化前期-中期初頭 (9-10世紀)	1150	950	1050	50	1.32		0.95		0.58		1.25		1.39		椿坂 (2007)	
K39 第6次調査	北海道, 札幌市	擦文文化前期-中期初頭 (9-10世紀)	1150	950	1050	50	1.38		1.03		0.56		1.42		1.34		椿坂 (2007)	
野木	青森県, 青森市	平安時代(9-10世紀)	1150	950	1050	4	1.64		1.29		0.73		2.12		1.27		椿坂 (2007)	
H-317	北海道, 札幌市	擦文文化 (9世紀末-10世紀前半)	1070	1000	1035	50	1.44		1.16		0.73		1.67		1.24		椿坂 (2007)	
K39 長谷工地点	北海道, 札幌市	擦文文化中期前半-後半 (9世紀末-10世紀前半)	1070	1000	1035	50	1.17		0.81		0.47		0.95		1.44		椿坂 (2007)	
K39 長谷工地点	北海道, 札幌市	擦文文化中期後半 (10世紀前半)	1050	1000	1025	7	1.39		1.11		0.69		1.54		1.25		椿坂 (2007)	
K39 管財課地点	北海道, 札幌市	擦文文化中期前半 (10世紀初頭前半-前半)	1050	1000	1025	20	1.41		1.04		0.58		1.47		1.36		椿坂 (2007)	
K435	北海道, 札幌市	擦文文化早期前半-後半, 中期後半-後期	1350	650	1000	30	1.27		0.9		0.52		1.14		1.41		椿坂 (2007)	
K39 第7次調査	北海道, 札幌市	擦文文化中期初頭-前半	1050	950	1000	18	1.36		1.02		0.57		1.39		1.33		椿坂 (2007)	
津寺 丸田調査区	岡山県, 岡山市	10世紀	1050	950	1000	5	1.92		1.49		0.92		2.86		1.29		椿坂 (2007)	
切田前谷地 (2)	青森県, 十和田市	平安時代中期 (10世紀中頃)	1010	980	995	2	1.53		1.3		0.78		1.99		1.18		椿坂 (2007)	
内蝦沢蝦夷館	青森県, 東北町	平安時代後期 (10世紀後半)	1000	950	975	8	1.93		1.42		0.96		2.74		1.36		椿坂 (2007)	
K440	北海道, 札幌市	擦文文化中期	1050	850	950	30	1.39		1.05		0.55		1.46		1.32		椿坂 (2007)	
往来ノ上 (1)	青森県, 東北町	平安時代	1150	750	950	30	1.54		1.32		0.88		2.03		1.17		椿坂 (2007)	
上野	岩手県, 一戸町	平安時代	1150	750	950	2	1.78		1.55		0.98		2.76		1.15		椿坂 (2007)	
高屋敷館 (74H 籾)	青森県, 浪岡町	平安後期 (11世紀)	950	850	900	50	1.897	0.29	1.424	0.22	0.806	0.15	2.76	0.77	1.33	0.08	吉崎・椿坂(1998c)	
サクシュコトニ川	北海道, 札幌市	擦文文化 中期前半-後期前半	1050	750	900	40	1.49		1.08		0.6		1.61		1.38		椿坂 (2007)	
高屋敷館	青森県, 浪岡町	平安時代(11世紀頃)	950	850	900	50	1.94		1.63		0.97		3.16		1.19		椿坂 (2007)	
K501遺跡	北海道, 札幌市	擦文文化中期-後期	1050	650	850	11	1.56		1.31		0.87		2.04		1.19		椿坂 (2007)	

那須 浩郎 (2018) 縄文時代の植物のドメスティケーション
電子付録S3から抜粋して着色した ©日本第四紀学会

表4 縄文時代の主なヒエ属類果のサイズ変化

遺 跡 名	地 域	時 期	サイズ(長さ×幅)m/m
中野B	H. 函館市	早期	1. 56
石倉貝塚	H. 函館市	前期初頭	1. 58
ハマナス野遺跡	H. 函館市南茅部	前期	1. 80
鳴川右岸	H. 七飯町	中期中葉	2. 00
大船C	H. 函館市南茅部	中期	2. 69
大船C	〃	中期中葉～末	2. 39
白尻B	〃	中期末	2. 21
富の沢	A. 六ヶ所村	中期	1. 69
キウス4	H. 千歳市	後期後葉	1. 48
青苗B	H. 奥尻町	統縄文時代 初頭～前葉	1. 95

※那須 浩郎(2018)縄文時代の植物のドメスティケーション電子付録3に基づいて作成 ©日本第四紀学会
※H=北海道 A=青森県

一方、銚の先端に取り付ける銚頭は雄型と雌型とに分類される。

柄を銚頭に差し込むタイプの雌型は獲物に命中した後、銚に結わえられた紐を引くと体内で回転することから回転銚とも呼ばれ、それがアイヌの回転離頭銚のキテへと引き継がれたと見られる。

その世界最古と目される雌型銚頭が北海道・オホーツク沿岸の網走湖底遺跡、及び東北北部の八戸湾沿岸の赤御堂貝塚遺跡と長七谷地貝塚遺跡から出土している。

出土遺物は共に縄文時代早期後半、或いは同前期初頭に位置付けられ、優に8,000BPを遡る。

以下は、北海道及び東北の雌型銚頭の出土年代と出土地域である。

☆北海道

- ・縄文時代早期後半【オホーツク海沿岸】
- ・同前期前半【道北部(礼文島)・オホーツク沿岸・道東太平洋岸(釧路川下流)・道央部(勇払平野周辺)】
- ・同前期後半【道央部(勇払平野周辺)・道南部(噴火湾沿岸・津軽海峡沿岸)】
- ・同中期後半【道南部(日本海沿岸・噴火湾沿岸)】
- ・同中期末～同後期初頭【道南部(噴火湾沿岸・



図80 網走湖底遺跡出土の骨製銚
北海道 網走湖底遺跡出土 縄文時代早期中頃
(網走市立郷土博物館所蔵資料)

津軽海峡沿岸)】

- ・同後期【道北部(礼文島)・道央部(勇払平野周辺)・道南部(日本海沿岸)】
- ・同晩期【道東太平洋岸(釧路川下流)・道央部(勇払平野周辺)・道南部(噴火湾沿岸・日本海沿岸・津軽海峡沿岸)】の36ヶ所の遺跡に分布。

☆東北

- ・縄文時代早期後半【八戸湾沿岸】
- ・同前期【日本海沿岸・陸奥湾沿岸・小川原湖沿岸・八戸湾沿岸・宮古湾沿仙台湾沿岸】
- ・同中期【小川原湖沿岸】
- ・同晩期【日本海沿岸・陸奥湾沿岸】の各遺跡に分布。

東北以南でも雌型銚頭が出土する遺跡は多数点在するが、縄文時代早期・同前期に該当する遺跡は皆無であり、朝鮮半島や北東アジア



図81 有珠モシリ遺跡 銚頭
(文化庁所蔵・伊達市教育委員会提供)

の遺跡からも雌型銚頭は出土しているが、北海道、東北北部の遺跡の年代を遡るものではない。

考古学的見地から見た「雌型銚頭」の最古の出土時期は縄文早期～前期頃で出土地域は北海道網走と東北北部の太平洋側である。

ヒエ属の種子においても出土時期、出土地域において、ほぼ「雌型銚頭」と年代が酷似する結果が得られている。

ということは、オキクルミの降臨時期、即ちイナウやヌササン(祭壇)による祭事の開始時期は、縄文早期～前期頃の北海道と東北北部であるとの結論に到達するのである。

次に御幣の起源について考察する。

◎御幣の起源◎

御幣とは神への捧物を指し、その意味は貴重な品を示す「幣」に、尊称の「御」をつけたもので祭祀において神に貴重な品々を捧げてきた「幣帛(へいはく)」に由来するという。

幣帛とは、ヤマトの神道祭祀において神に奉獻する、神饌(食事)以外の総称であるが、広義には神饌(米・酒・餅・海魚・川魚・野鳥・水鳥・海菜・野菜・菓子・塩・水など)をも含み、みてぐら、幣物とも呼ぶ。

幣帛の原点は、古墳時代前期以来の祭祀遺跡から出土する副葬品であるという。

遺跡からは鉄製品(武器・農耕具など)、玉、鏡、紡織具や布帛、須恵器など大陸から輸入された最新技術の製品が出土している。

これらの品目は飛鳥時代以降の律令制祭祀の原型・起源になったと考えられている。

『延喜式』四時祭によると、幣帛には稻、酒、鉄製の武器、農工具、器、玉、鏡、布類(養蚕)などがあり、奈良時代後半から平安時代前期にかけて幣帛は特に布類を指している。

神道では麻や苧麻(カラムシ或いはチョマ)は、



図82 御幣
(折橋商店ホームページから引用)

大麻(オオヌサ)や注連縄・お札などの特別な神具として使われ、この麻を「ヌサ」と読む。

これは神前に捧げる布や麻・楮(コウゾ)を材料とする木綿(キウ)を総称した幣(幣帛)を「ヌサ」と呼ぶことに由来し、平安時代中期に編纂された律令の施行細則である「延喜式」などでは幣のことを御麻(ミヌサ)と記す。

木綿とは、幣帛とともに串に挿んで垂らした木の皮の繊維で神聖性を表現するとされ、イナウのキケ(房)に相当するようだ。

そして神前から下げられた捧げ物である布は神が宿る(依り代)としてお祓いの神具や神札として使われるようになっている。

捧げ方は多様化し、折り畳んだ布を串に挿んで捧げるものを幣挿木(へいはさむき)と呼びお祓いなどにも使用される。

時代が経つにつれ幣帛は布に代わって当時貴重であった楮から作られた紙を奉獻する場合に限って用いるようになり、その後、幣挿木に使われていた布に代わって細長く折り下げた紙を両端に垂らした御幣の原型と推測される「紙垂(シデ)」が登場する。

御幣は、竹、または木の幣串に金銀、或いは白色、五色などの紙を挟んだ形状のもので、古くは布帛を奉る場合、多くは串に挟んで奉



図83 御幣
(折橋商店ホームページから引用)



図84 イナウ
(川村カ子トアイヌ記念館所蔵)

られたが、今日のスタイルはそれが変化したものであるという。

形状も、初めは四角形の紙を用いただけのものであったが、後にその両端に垂をつけ紙垂になり、その形は稲妻(雷)を模しているようだ。

邪悪なものを寄せ付けない力が備わっていると考えられていた雷(落雷)には、稲の成長を促すことに起因して五穀豊穡が祈願された。

元々御幣は、神祇(ジングイ=天地の神々)に奉獻するものであったと言われているが、社殿の奥深くに立てて神霊の依り給う御神体として、或いは神前に据える装飾として、また参拝者に対する祓具として用いられるようになり、神楽に用いる御幣は専ら「払具」としての側面が強調されている。

お祓いに使われる神具は大麻(おおぬさ)と呼ばれ現在は紙が使われることが多いが古来では麻が使われ、栃木県では今も削りかけに類似した野州大麻(ヤシュウオオヌサ)を製作、販売している。

御幣とは神への奉獻を意味し、その原点は古墳時代の祭器遺跡の副葬品であり、飛鳥時代から平安時代にかけては布類を示した幣帛であったが、その後、布から紙へと移行して紙垂の形式を採用した御幣が誕生している。

◎幣帛のルーツは朝鮮半島か？◎

幣帛は、神に奉獻する物の総称である。

最近では少なくなったが、韓国では伝統的結婚儀式を幣帛(ペベク/pebeku)という。

新郎新婦が伝統衣装の韓服(ハンボ)に着替えて、お互いの両親や近親者に結婚の挨拶をする儀式のことであるが、元々はその席で奉獻される捧物を意味しており、捧物を奉獻するという点では、日本の幣帛と同じ意味合いである。

韓国のシャーマンの祭事である巫祭では、

「神刃の上を踏み歩く神刃渡りがあり、弓を射手悪霊を遠くへ追い払い、幣帛をたらして聖所を標示し、五色の幣帛を五方位神のシンボルに用いる」という。

(金両基=キムヤンキ 1976)

韓国済州島の宗教儀礼であるヨワンマジ(竜王迎え)によると、

「(中略)祭場に発砲スチロールの坂を道のように並べ、その上にトゥンブと呼ばれる海藻やこぶし大の石を数個乗せ、紙幣や切紙を付けた笹をその両脇に8本ずつ2列に建てていく。

これらは、ヨワンとヨンドウ神が来臨する門と道を表すとされ、ヨワンムン(竜王門)と呼ばれる。

そして、その祭場入口側にヨワンジ用の祭壇が設けられ供物が供えられる(後略)」。

(政岡伸洋 2013)

巫女祭では幣帛が用いられ、また複数の笹に付けた紙幣や切紙は御幣と類似する。

巫女は韓国に初めてできた国家である古朝鮮時代から存在していたと見られていることから、幣帛はヤマトの巫女である卑弥呼を介して朝鮮から持ち込まれた可能性も指摘される。以上、「御幣」について概説した。

次にイナウと御幣及び本州以南の削りかけ(含む北方及び東南アジアの諸民族)」のそれぞれの関係性を明らかにするべく、両者の概説に基づいて内容をより簡素化した「イナウと御幣との比較表」及び「都府県別削りかけ・削り花の一覧表」を作成したのでご覧いただきたい。

「ヒエ」や「銚頭」の考古学的考察、及びアイヌの口承文芸から、オキクルミの降臨時期が縄文前期頃であることは既に明らかにした。

では、多角的検討を加えて作成した「イナウと御幣との比較表」及び「都府県別削りかけ・削り花の一覧表」に基づいて、タブー視されてきた「削りかけ」のルーツを明らかにしてみよう。

イナウと御幣の比較表の検討からは以下の内容が明らかとなる。



図85 古代のイナウ状木製品
・西根遺跡出土

西根遺跡木製品画像データ(図版49-2)
縄文時代後期 (千葉県教育委員会所蔵)

★イナウの発音と北方の諸民族のイナウ状木製品の発音は同系列の音韻である。

しかし、御幣とその仲間である同義語にはイナウに該当する同系列の音韻は見当たらない。

★イナウの起源は天界より降臨のオキクルミであり、イナウの「イナ」には“伝言”“ことづて”などの意味がありコミュニケーション的要素が強い。

★オキクルミの考古学的考察からイナウの始期は縄文時代早期末～前期頃と推定される。

★イナウには、人間の言葉を神々へ届け、また神々の意向を人間に伝える仲介者的、メッ

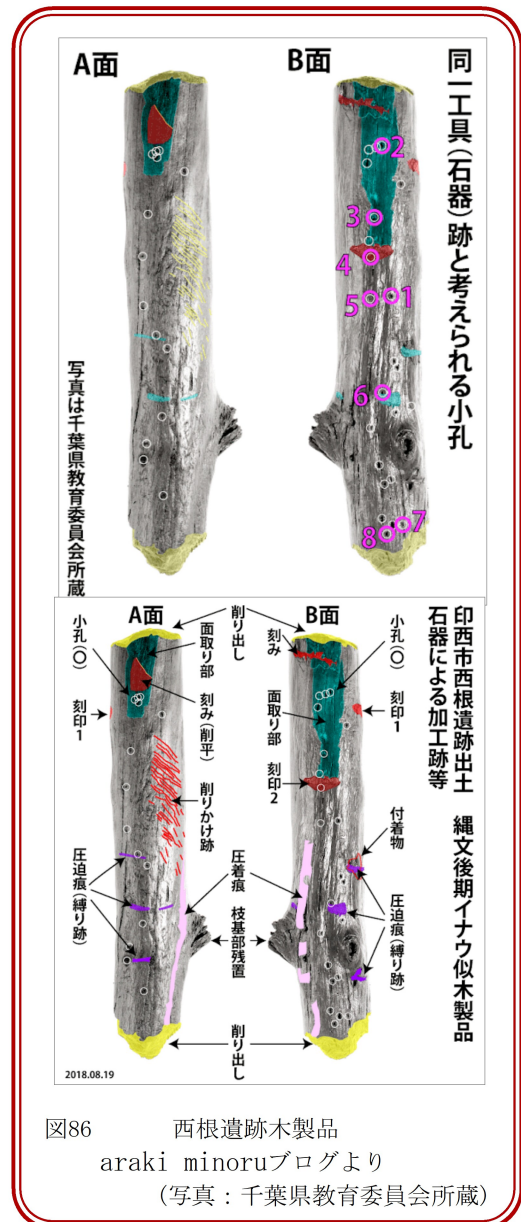


図86 西根遺跡木製品
araki minoruブログより
(写真: 千葉県教育委員会所蔵)

表5

◎ イナウ と 御 幣 の 比 較 ◎

	イナウ	御幣 (ごへい・みてぐら)
同系列の音韻及び関連語	・アイヌ イナオ (inao) イナウ (inau) ・ニブフ族＝ギリヤーク (inou・naw) ・ウイльта族＝オロッコ (illau) ・オロチ族 (ilau)	・大麻 (おおぬさ) ・幣束 ・みてぐら ・幣挿木 ・斎串
起 源	・天界 (宇宙) より降臨のアエオイナ (オキクルミ) に由来 ・天界よりアイヌラックル (オキクルミ) が下界に持参する ・オキクルミが柳を授けイナウの作製を教える	・神道 ・特に布類を指す「幣帛」から幣挿木 (へいはさむき) の形式をとり、後に紙を両側にたらし幣串に挟んだ紙垂 (シデ) を御幣と呼ぶ
語 源	・アイヌ語 Ina (伝言) o (～に乗る) に由来	・神に奉獻する貴重な品々 (農工具、鉄製の武器、鏡、玉、麻、布類、紙など) を示す「幣束」の敬称
使 用 目 的	・神への捧げ物 ・神への捧げ物を運ぶ乗り物、霊送りでは送られる霊の杖や足、乗り物になる ・人間の祈願や感謝の気持ちを神に届ける ・神々の意向を人間に伝える ・守護神	・神への捧げ物 ・神が降りるための媒体 (依代) ・穢れを取り除き空間を清める
使 用 方 法	・神事、祭事においてイナウを並べてヌササン (祭壇) を作る ・家族神 (守護神) として屋内に祀る	・神主がお祓い棒として振る ・社殿の奥や家の神棚に祀る
樹木の種 類	・ヤナギ、エンジュ、ミズキ、ヤチカンボ、カシワ、ナラ、キワダ (キハダ)	・ヒノキ、竹、麻、木綿、紙、 ・斎串 (ヒノキ・スギ)
処 分 方 法	・捧げたイナウは触れず土に還るに任せる ・用途により火中、水中に投じることもある	・神社の「古札等納め所」に持参、神社は「焼納祭」「どんと焼」の祭儀を行う
備 考	・それぞれの神に合うものを選ぶ ・頭部に刻む刻印によって様々なカムイに捧げるイナウを作り分ける ・イナウを作り儀礼を行うことは人間の義務 ・イナウは「ヌサ・タクサ・エプス」が一つになって形成される ・アイヌには依代や鳥の象徴とする考えはない	・古墳時代から平安時代にかけて出土する斎串はほとんどがヒノキ、スギを使用 ・室町時代から江戸時代にかけて、櫛 (玉串・真櫛) のほか、神前に御幣を捧げる形が普及 ・落雷があると稲が育つことから紙垂の形は稲妻を表す

センジャー的性格が強く感じられ、そのような観点からイナウの集合体であるヌサやヌササンなどを考察すると、遠隔者との意思疎通や情報伝達を可能としたある種のコミュニケーションデバイス (通信装置) としての役目が浮上し、その比重が高いと考えられる。

★イナウは各家庭の守護神的役割も担う。

★それに対して御幣の役割は捧物やお祓いが主体となる。

★御幣は神々への捧げものを表す漢語の幣帛

を起源とし、古墳時代前期頃の祭祀遺跡の副葬品に始まり、それが幣帛→幣挿木→紙垂→御幣へと変遷している。

★御幣そのものには仲介者的、メッセンジャー的役割は存在せず、一般的には霊媒師的性格を有する巫女や神主がその代役を務めている。

★イナウの製作には、オキクルミが指定したヤナギ、ミズキ、ヤチカンボなどの樹種を主に使用するが、御幣では指定のないヒノキや竹、木綿、紙などを使用する。

表6

◎ 東北以南に残る削りかけ・削り花一覧 ◎

地域		名称	使用方法・使用目的など	参考文献
青森県	上北郡上北町 下北郡脇野沢村	・山の神の削りかけ	・小正月に神仏などに供える	・北海道総合博物館資料
岩手県	遠野市 久慈市山根	・夕顔 ・ケズリバナ ・ヒガンバナ	・小正月に1m程にしたクルミの木を削って幣のように 五本～七本位長く垂らした神棚の脇に立てかける	・岩手県教育委員会 文化財調査報告第二十二集久慈市山根の民俗
宮城県	牡鹿郡牡鹿町 登米町 津山町 仙台市 石巻市	・イワイモーシギ ・彼岸花 ・ケズリバナ ・削り花	・祝い申し木であると記されている ・コシアブラで作った削り花を墓の前に供える	・杉山 寿 宮城県牡鹿郡牡鹿半島における祝い行事とアイヌイナウの関連性について ・仙台市史編さん委員会 仙台市史特別編6 ・石巻高等学校図書館 削りかけることについての考察「石巻地方の歴史と民俗」
秋田県	にかほ市・藤森町 大館市・横手市 能代市 飯田川町 八郎潟 五城目町 秋田市 河辺町 角館町 西木村 千畑村 稲川町	・梵天（ぼんでん） ・ボンデコ ・祝儀棒 ・削り花 ・ヒガンバナ ・彼岸花 ・ヒョウギ ・初嫁棒 ・嫁つき棒 ・サイの神様 ・ホデキ棒 ・ケズリバナ	・彼岸に仏壇の前に供える ・農作物の豊かな稔りを示す ・農作物の豊穣祈願 ・子供達が成木責めを行う ・木を薄く削って、赤・青・黄に染めたヒガンバナを墓に供える ・墓にこしあぶらの木を3削った彼岸花を供える ・寒冷地の彼岸では生花がないため造花を供える風習が続いてきた	・秋田県立博物館収蔵資料 ・藤里町史編纂委員会 藤里町史 ・大館市史編纂委員会 大館市史 ・能代市史編纂委員会 能代市史 ・飯田川町史編纂委員会 飯田川町史 ・八郎潟町史編纂委員会 八郎潟町史 ・五城目町史編纂委員会 五城目町史 ・池田 昭治執筆編集 秋田市太平郷土史 ・秋田県 秋田県史 ・国書刊行会 河辺郡誌 ・角館誌編纂委員会 角館誌7、9巻 ・西木村郷土誌編纂委員会 西木村郷土誌 ・千畑村郷土誌編纂委員会 千畑村郷土誌 ・稲川町教育委員会 稲川町史 ・横手郷土誌史編纂委員会 横手郷土史資27 ・木崎和広「秋田のケズリカケとその伝承について」
山形県	米沢市笹野 東田川郡朝日村 白鷹町 長井市	・ハナ ・削り花 ・彼岸花 ・水がめ用ヌサ	・米沢市笹野千手観音の縁日に売られる縁起物 ・ホダレの残り木で作り水かめに供える。 ・長井市森には数百年前から続けられた伝わる削り花がある	・北海道総合博物館資料 ・白鷹町史編纂委員会 白鷹町史 下巻 ・米沢市史編さん委員会 米沢市史-民俗編
福島県	二本松市 郡山市 白河市 会津若松市 喜多方市 桑折町 梁川町	・彼岸花 ・削り花 ・ヤマバナ	・雪が多い時期に生花の代わりに春の彼岸に仏壇、墓に供える（現在でも彼岸になるとスーパーなどで売られる） ・花は松の木を薄く削ったものに赤・紫・黄・ぼたん色など原色に三枚程中心を挿し前後を萩の茎の丸切にしたもので止める	・二本松市 二本松市史 ・坂本英一 群馬の小正月ツクリモノ 下 ・松崎かおり ハナタケ（花竹）習俗にあらわれる削り掛 ・白河市 白河市史9 ・喜多方市教育委員会生涯学習課文化振興班編 喜多方市史9 ・桑折町史編纂委員会 桑折町史3巻 ・梁川町郷土史研究会 梁川町史11
栃木県	佐野市天神町 新治村 栃木市入船町 日光市 那須塩原市 鹿沼市	・ハナ ・カユカキボウ ・ハラミバシ ・クルマバナ ・栗穂稗穂	・その年の農作物の豊凶や天候を占う粥占い ・粟・稗など五穀の豊穣を祝う ・小正月に神棚に供える ・二本のカユカキボウで小豆粥をかき混ぜる ・ハラミバシで小豆粥を食べその後十字に縛りオカマ様の後ろ屋根裏に突き刺して置く	・北海道総合博物館資料 ・栃木県立博物館収蔵資料
群馬県	桐生市黒保根町 藤岡市金井 中之条町 甘楽町 上野村 東吾妻町 長野原町	・ケズリバナ ・ジュウロクダンバナ ・クルマバナ ・ホダレ ・ハナ ・エビスノハナ ・ナゲバナ ・カユカキボウ	・オシラサマ（蚕神）に供える ・十二様（山の神）に供える ・小正月に玄関や神棚、家外内の神仏に供える ・2本一組でエビス・ダイコクサマに供える ・戸外の神に供える・墓に供える ・玄関、門口に飾る ・神棚の前に下げる ・魔除けとしたり子供の遊び道具とした祈願品	・北海道博物館・群馬県立歴史博物館・アイヌ文化財団編「アイヌのくらし-時代・地域・さまざまな姿」
埼玉県	比企郡都幾川村・嵐山町・小川町 秩父郡横瀬町・荒川村・鹿野町・皆野町・長瀬町・東秩父村 秩父市浦山 大里郡川本町 大里郡寄居町 児玉郡上里村 深谷市	・水口の守り神 ・十二バナ ・十二階バナ ・十六バナ ・ハナ ・カキバナ ・オマモリガタナ ・カユカキボウ ・ハラミバシ ・ダイノコ	・五穀豊穣を神に祈る為に供える ・蚕神・お釜様に供える。 ・小正月に繭がよくできるように願う ・水口祭りの祭具に用いる ・ハラミバシで嫁の尻を叩く ・かいたハナを長さ約40cmぐらいに切り皮をむいた穂を二本、皮の付いた穂を一本とともに竹の柄に付ける ・恵比須、大黒様、天神様に供える	・北海道総合博物館資料 ・埼玉県歴史資料館 小正月とモノツクリ

神奈川県	高座郡御所見村 藤沢市 秦野市 足柄上郡	・ 削りかけ ・ 削りばな ・ アワボ・ヒーボ	・ トシガミ様を迎えるための正月飾りに使う ・ 正月の初めに作って神仏に供える ・ 畑に立てる	・ 北海道博物館収蔵資料 ・ 神奈川県ホームページ ・ 神奈川県立博物館研究報告-人文化学-第十二号（鈴木通大）
新潟県	中魚沼郡津南町 越後古志郡二十村 大和町桐沢 新発田市 岩舟郡山北町	・ ケズリカケ ・ 嫁叩き棒 ・ サイノカミ ・ ヨネクラバナ ・ かゆ箸 ・ ヤイカガシ ・ ハナバシ	・ 新嫁の尻を棒で叩き、妊娠・出産を祈る ・ 1尺位の「けずりかけ」をサイの神様の上に高く投げ上げる ・ 入りの日に造花の一本、蓮華やヨネクラバナ（削り花を仏壇に上げる） ・ 魔除け	・ 北海道博物館収蔵資料 ・ 新発田の民俗 下 ・ 「越佐の小正月行事」新潟県教育委員会
石川県	輪島市海士町	・ イワイボウ ・ 祝い棒 ・ デーナガボウ ・ ヨメガボウ	・ 櫛比神社の春季例大際に行う田遊び神事「万歳楽土」で稲束に見立てた祝い棒と若松の枝を振って豊作を願う	・ 輪島市教育委員会提供資料 ・ 石川県櫛比神社提供資料
長野県	飯山市 佐久市 南佐久郡南相木村 飯田市 北安曇野郡小谷村 三郷村 長野市 下伊那郡天龍村 木曽郡上松町 白馬村 西筑摩郡大桑村 下水内郡栄村	・ 削り花 ・ ゴイワイボウ ・ サイノカミに供える花 ・ 小豆粥用箸 ・ ゴシンタイ ・ オンマラ ・ ケーカキボウ ・ 削り掛け ・ 恵比須の箸 ・ 三段の花 ・ 木花 ・ 十二月 ・ 十二月 ・ 大根 ・ はらみ箸 ・ 花	・ 御幣として神棚、仏壇、床の間、台所、井戸、便所などに飾る ・ 正月飾りのしめ飾りを外した後に門口、蔵などに飾る ・ 子供達がこれを持ち新婚の家を回り縁側や玄関を叩く子宝祈願 ・ 1月18日の朝に小豆粥を食べる時に使う箸で削りかけの部分は作物の豊作をあらわす ・ 小正月の道祖神祭りで作られ道祖神碑の前に供える ・ しめ縄飾りをとった後、御幣として神棚、仏壇、床の間、台所、便所などに飾る ・ その年の豊作を占う ・ 豊作物の花に見立ててヌルデの木を削って作る ・ 恵比須に供え木の下に削りを入れ十二月と書く	・ 「長野市立博物館収蔵資料目録民俗2」長野市立博物館 ・ 「道祖神信仰の源流」平川 南
岐阜県	飛騨高山	・ 嫁祝棒 ・ 祝い棒	・ 小正月に新嫁のおしりを叩いて子孫繁栄を願う	・ 日本土鈴館ホームページ
静岡県	静岡市葵区田代 静岡市葵区内匠 葵区野田平	・ ダイノコ ・ 削りかけ ・ 削り花	・ 小正月に神棚、恵比寿様に供え。 ・ 小正月に門口両側に立てかける。 ・ 小さいダイノコは神棚や墓神社などに立てかける	・ 静岡県観光交流文化局提供資料
三重県	熊野市	・ ケズリバナ ・ 削り掛け ・ 鬼の目突き ・ 削り掛け	・ 小正月に神棚、恵比寿様に供え。 ・ 小正月に門口両側に立てかける。 ・ 杉、檜を使い秋刀魚や鰯の頭をケズリバナの先に割れ目を入れて挟む	・ 「熊野市史 下」同史編集委員会 ・ 「紀伊熊野市の民俗11・13・14」熊野市教育委員会・大谷大学民俗研究会編刊
和歌山県	北山村 本宮町 太地町 大塔村 那智勝浦町 新宮市史	・ ケズリ花 ・ けずの花 ・ 削り花 ・ オコゼの魚 ・ ツクリバナ	・ ヒイラギとイワシを割木削ってケズリバナにしたものに挟んで門口にさす ・ 山仕事をする時は木を削って削り花を作り「大山の神」と書き、方角の良い所にまつる ・ 山の神には削り花を左右に並べて供え、山の神は女であるから男根も供えて祭る	・ 田中敬忠 紀州今昔-和歌山県の歴史と民俗 ・ 一条兼良 近畿民俗72 ・ 北山村史編集委員会 北山村史 下 ・ 野本寛一 熊野山海民族考 ・ 近畿民俗学1985 ・ 熊野の民俗-和歌山県本宮町 ・ 宇江敏勝 熊野川 ・ 熊野路編さん委員会 熊野中辺路歴史と風土 ・ 和歌山県民話の会 熊野本宮の民話 ・ 新宮市史編さん委員会 新宮市史 ・ 同史編集委員会 熊野市史 下 ・ 熊野市教育委員会・大谷大学民俗研究会編刊 紀伊熊野市の民俗11・13・14
奈良県	川上村 上北山村 下北山村 野迫川村 天川村 十津川村	・ 削り花 ・ ケズリバナ ・ サカグシ ・ カザリバナ ・ カンザシ ・ ケズリカケ	・ 昔は山の神を祭るときは必ずケズリバナを供えた ・ 大きなボタモチ、果物、お神酒などと共にケズリバナも供えた ・ 七寸ほどの長さの木にうろこにあたることをけずりつけて紙に包んで供える ・ 1月2日のヤマグチ（山初め）にヒノキカスギでケズリ花を作り、山の神に供える ・ 山の神は女の神様だからカンザシ（ケズリカケ）とヘノコ（男性器）を供えた	・ 「あしな第93号」山村民俗の会 ・ 「奈良県立民俗博物館だより1993通巻第64号」浦西 勉 ・ 「野迫川村民俗資料緊急調査報告書」奈良県教育委員会 ・ 「十津川村探訪録 民俗2」林宏 ・ 「上北山村の民俗と生物」上北村役場 ・ 「下北山村史」木村博一 ・ 「山の神祭りにおける木製祭具の研究」松崎憲三

徳島県	半田町 羽ノ浦町 上勝町 今津村 相生町 日和佐町	・送り箸 ・福杖 ・粥柱 ・粥杖 ・カエ柱	・家の柱を叩いて柱が終わると柿やみかん、作物にもはねかけて豊作を祈願する ・柳の枝の先を尖らせ根元からから5センチほどは皮を残しておき逆さに五か所剃り上げるようにする。 ・正月棚に供え門先きや畑などに立てて正月の神を送る。 ・門松の一部で削掛を作り米を粥にし桶に入れて柱を叩く。 ・削り掛けの杖を二本作りそれと粥を炊いて正月棚に供えておく	・四国民俗学会 四国民俗33
香川県	白鳥町入野山	・ダイコンギ	・その年の恵方にダイコンギ（削りかけ）を立て15日の粥を供えて正月の神を送る	・四国民俗学会 四国民俗33 ・白鳥町史編集委員会1985 白鳥町史
大分県	米水津村 蒲江町 本耶馬溪町 国東半島	・尻うち棒 ・はらめ棒 ・香水棒 ・鬼ヤライ	・大晦日の夜に悪鬼を祓う鬼祭りと火祭りに使用する	・北海道博物館所蔵品資料 ・民俗学研究会「民俗探訪第27集」 ・蒲江町史編さん委員会「蒲江町史」 ・本耶馬溪町史刊行 編「本耶馬溪町史」 ・小玉 洋美 染矢 多喜男「成仏寺の修正鬼会」
長崎県	平戸市・壱岐市 芦辺町・上対馬町 上五島・新魚目町 奈留町・三井楽町 玉之浦町・野母崎町	・道祖神 ・たたき棒 ・シリタタキ棒 ・シリマンジュー ・ハナモンジョー	・子宝、縁結び、五穀豊穰 ・道祖神に供える	・民俗探訪第27集 蒲江町史 ・蒲江町史編さん委員会 蒲江町史 ・本耶馬溪町史刊行会 本耶馬溪町史 ・山口 麻太郎 日本の民俗長崎 ・芦辺町史編集委員会 芦辺町史 ・新対馬島誌編集委員会 新対馬島誌 ・上五島町 上五島町郷土誌 ・長崎県教育委員会 民俗資料調査報告書 ・奈留町郷土誌編集委員会 奈留町郷土誌 ・長崎県教育委員会文化課 下五島貝津・大串の民俗 ・三井楽町 三井楽町郷土誌 ・玉之浦町郷土誌編集委員会 玉之浦町郷土誌 ・野母崎町役場 野母崎町郷土誌
熊本県	天草市本町平床 天草市久玉町 天草市有明町 天草市五和町 天草郡苓北町 天草市龍ヶ岳町 牛深市九玉町 葦北郡田浦町	・ナレナレ木 ・ハラメンボウ ・ハナマンジュー ・花まんじゅう ・モグラウチ ・ケズリカケ ・嫁叩き ・なれん棒	・果実が成るようにと木を叩く ・子供を沢山産むようにと花嫁の尻を叩く ・五穀豊穰、家内安全 ・小正月に柳の木を白く削った棒を作り、その日に里帰りしてくる花嫁と婿の尻を棒で叩きながら歌う	・熊本県天草郡五和町教育委員会 五和町史資料編（その二）五和町の民俗聞き書集 ・小野 重朗 農耕儀礼の研究 ・天草郷土誌編集委員会 天草町郷土誌 ・芦北町史編集委員会編纂 芦北町誌 ・津奈木町誌編集委員会 津奈木町誌 ・水俣市史編さん委員会「新水俣市史民俗人物編」 ・熊本商科短期大学民俗学研究会「天草 下島」民俗調査報告書
宮崎県	南那珂郡北郷町 南那珂郡南郷町 須木村 小林市 えびの市	・嫁叩き ・ハラメン棒 ・ナレナレ ・ハラメ木 ・ハラメ棒	・タラノキを白く削って穂にし、竹を茎葉にしてつけたもの（アワノホ）を家の数だけ作りアワノホで雨戸をコトコト叩いて来訪神の来意を知らせる ・子供が家々を回って「ナレナレ」と唱えながらミカンや柿の木を叩く	・宮崎県 宮崎県史民俗2 ・小林市史編集委員会 小林市史第3巻 ・加久藤町郷土誌編集委員会 加久藤町郷土誌
鹿児島県	大口市・屋久町 谷山市・菱刈町 川内市・種子島 垂水市 栗野町 屋久島 始良町 吉松町 国分市 宮之城町 日吉町 知覧町 指宿市 下甕村	・ハラメ棒 ・カキナレ ・削りかけ ・ケズリカケ ・ナレナレ棒 ・柳の箸 ・嫁叩き	・ハラメ棒は梅や柿の木にかけておくと実がよくなる ・果実が成るようにと木を叩く ・削りかけを施した竹の先端に米と粟の餅を2個ずつつけ、仏壇や床の間などに供える ・ネコヤナギの木の上部を削りかけた棒を10本くらい作り、タラノキとモロと共に1月6日に仏壇、床の間、墓、門口等供えた ・ハラメ棒とは別に大きいケズリカケを作って、花嫁のきた家に行く ・モッモレ（餅買い）といって十四日の昼に子供達が花嫁のきた家にケズリカケをもっていき餅を貰う ・縁側の外から、家の中に向けてハラメン棒を両手をもって突き出したり、ひっこめたりする ・大黒柱に押し付け、ハラメ棒の削りくずを嫁の頭に振りかける	・大口市 大口市郷土誌上巻 ・川口市誌編集委員会 川内市誌 下巻 ・垂水市誌編集委員会 垂水市誌 上巻 ・国分郷土誌編集委員会 国分郷土誌 下巻 ・谷山市誌編集委員会 谷山市誌 ・指宿市役所総務課市誌編さん室 指宿市誌 ・下野 敏見 屋久島の民族文化 ・宮之城町史編集委員会 宮之城町史 ・小野重朗 鹿児島歳時十二月 ・始良町郷土誌改訂編さん委員会 始良町郷土誌 ・知覧町郷土誌編さん委員会 知覧町郷土誌 ・文化財保護委員会 正月の行事第1巻 ・吉松郷土誌編集委員会 吉松郷土誌 ・日吉町郷土誌編さん委員会 日吉町郷土誌 下 ・小野 重朗 農耕儀礼の研究 ・（財）日本常民文化研究所 小正月行事とモノツクリー南九州・大和ほかー



図87 太陽のピラミット
古代におけるオキクルミの居城を
アイヌの聖地ハヨピラに復元した
(北海道平取町)

総括すると、イナウはアイヌと天界とのコミュニケーションを可能とする神聖なツールであり、それに主体性が置かれているのに対して、御幣は捧物(供物)やお祓いに主体性が置かれている。

縄文ヒエや雌型銚頭の出土年代が示唆するように「イナウ」の始期が縄文時代早期末から前期頃であるのに対して、御幣(幣帛)の始期は古墳時代前期頃であり両者の年代には格段の開きが生じている。

続いて、本州以南に分布する「削りかけ」について考察する。

◎本州以南の削りかけの考察◎

本州以南に分布するイナウ状の削りかけ・削り花は、名称、形状、用途、そして樹種など実に多彩で1月14～16日の小正月(花正月)の伝統的行事や風習などと密接にリンクする。

例えば、1月15日の粥(小豆粥)を食する全国的風習を筆頭として、粥杖(カユヅエ)で嫁(新婦)の腰や臀部をたたいて子孫繁栄を願う風習。作物の作柄を占う粥占(カユウラ)の風習。

小さな花を作り、餅花、粟穂稗穂(アワボ・ヒエボ)などを農作物にかたどり、それを飾木に成らせる豊穰祈願の風習。

養蚕の繁盛を願い飾木に繭玉(マユダマ)をならせる風習などが残っている。

長野県上田市下之郷の生島足島神社では、1月14日に農作物や養蚕の豊饒を占う「御筒粥ト神事」が行われ、その占いの結果を報告する翌15日の「御筒粥ト奉告祭」へと続く。

同神社由緒記によると、これらの神事は諏訪大社に祀られたタケミナカタが諏訪に赴く際に万物を生成させる生島神と、万物を満ち足らしめる足島神に粥を煮て献飯する「御籠祭」に由来しているという。

「御籠祭」には、ヤマトの東征(武力侵略)の結果、伊勢から諏訪へと後退を余儀なくされたタケミナカタへ住民が粥を献上したことに由来するとの逸話もある。

タケミナカタの記録から粥占の起源は弥生時代後期から古墳時代前期にまで遡ると考えられた。

他の風習としては果樹をナタや粥杖でたたいて豊穰を願う成木責めなどがある。

豊穰祈願の飾木には1月14日に削った楊(ヤナギ)やヌルデが用いられ、粥杖には1月15日に粥を煮た時の燃えさしの木を削って作成した杖が用いられている。

粥杖は「粥の木」或いは「削掛」「祝木」「枚(バイ)の木」「祝棒」「幸の木」とも呼称し、ヤナギが主であるがヌルデ、マツ、スギなども使用する。

ヌルデの木などで祝い箸(バシ)や嫁たたき棒という祝い棒をつくる風習も全国各地に分布する。

また小正月には左義長(サギチョウ)やドンド焼き、サエノカミ、オンベ、サンクロウや道祖神祭り、ホッケンギョウ(北九州)などと呼ばれる火祭りが全国的に見られる。

その火祭りと削りかけとの関連性を象徴するものに、京都八坂神社で行われる「削掛の神



図88

東大寺二月堂修二会(お水取り)
松明の先端には花びら状のケズリカケが使用される。
東大寺二月堂修二会(写真提供：フォトブログ「奈良大和路～悠～遊～」)

事(おけら祭)」がある。

大晦日から元旦にかけて神木から作った6本の削りかけを焼き、煙の方向で丹波(西)、近江の(東)豊凶を占うのである。

1月12日から13日にかけて行われる奈良の東大寺二月堂修二会(お水取り)の行事では、8天(8名)がそれぞれ大たいまつを持つ火天と灑水器(シャスイキ)を持つ水天に分かれて境内を巡り歩く達陀(ダッタン)の所作を行う。

圧巻は大松明を引きずり堂内を10回巡る「火天」で、その達陀松明の先端にはずらりと花びら状に差し込んだ「削りかけ」が認められる。

どちらかというと「水の祭り」より「火祭り」の要素が強い行事である。

奈良の南に位置する紀伊半島(和歌山)の熊野大社の摂社である神倉神社の「お灯祭り」では、削りかけ状のカナナ屑をたらしした松明が使用されている。

同じく和歌山県の熊野那智大社では、五穀豊穰と家内安全を祈願した日本三大火祭りの一つである勇壮な「那智の扇祭り」が行われている。

氏子に担がれた削りかけを装飾した12基の扇神輿(幅1m高さ6m)が、炎で参道を清める重量約50kg～60kgの大松明12基を従えて、熊野那

智大社から那智の大滝を目指すのである。

それぞれの扇神輿には、扇に計32個の“日の丸”と呼ばれる真赤な太陽マーク(1枚の扇に3個)を描き、各神輿の先端には細長い木の板が輝く日輪を象ってほぼ放射状に配され、氏子が手にする扇にも太陽マークが描かれている。

その扇神輿には「蝶髭(チョウヒゲ)」と「縁松(ヘリマツ)」と呼ばれる削りかけが取り付けられ、滝の下で扇神輿の鏡を打つ祭具である「打松」と呼ぶ削りかけも用いられている。

氏子たちの口伝で製法が語り継がれた削りかけは、紀伊半島の山の神祭りにみられるケズリバナの形態上の特徴を継承しているという。

ヤマトの武力侵略に抵抗した原住民の丹敷戸畔の勢力圏であった和歌山県太地町の海中に聳え立つ太鼓岩(和歌山県太地町)には三重の見事な太陽マークが刻まれている。

大和(奈良)の地を目指したヤマトの侵略沿線に当たる和歌山県の太地町・那智勝浦町・新宮市・本宮町(現田辺市)・北山村、奈良県南部の十津川村・下北山村・上北山村・天川村・野迫川村などに“削りかけ”の風習が色濃く残っていることから、ヤマトへの抵抗勢力は古来より“削りかけ文化”の継承者であったと見ることができる。

西日本一帯には五穀豊穰や家内安全を祈願す



図89

「那智の扇祭り」

和歌山県 熊野那智大社（熊野那智大社提供）

るオコナイ（仏教系では修二会式）と呼ばれる正月行事がある。

特に滋賀・奈良・和歌山の各県には濃密に分布し、そのオコナイで使用するハナには削りかけの手法が応用され、平安中期の修二会に飾っていた造花は「けずりかけ」を装飾化したものであるという。

また正月には若者が家々を訪れるホトホト、コトコト、トタタキという民間行事が全国的に散見される。

類似するものとして新年や小正月、節祭などの1年の変わり目に行われる異郷の世界からやって来るという来訪神行事がある。

仮面や笠、藁蓑など異形の神に仮装した地域の若者、或いは特別な資格を有する村人が家々を訪れ、五穀豊穰、無病息災、家内安全・子孫繁栄などを祈願或いは予祝する。

地域によっては人間教育の一環として子供をしつけ、怠けものの大人には訓戒を与えている。

来訪神行事は、東北・北陸・九州・南西諸島などの地域に顕著に分布している。

☆秋田県男鹿市のナマハゲ

〔鬼の面を被り異様ないで立ちのナマハゲが子供には教育（しつけ）、怠ける大人には訓戒を与え、厄災を祓い、豊作・豊魚・吉事をもたらす〕

☆岩手県大船渡市のスネカ

〔ナマハゲに同じ〕

☆宮城県登米市の米川の水かぶり

〔体にワラで作ったしめ縄を巻き、「あたま」と「わっか」を頭から被り、頭にかまどのススを塗った火の神様の化身、家々の前に用意された水を屋根にかけ、火伏を祈願する〕

☆山形県上山市のカセドリ

〔「ケンダイ」という藁蓑を被った若者に手桶からの祝いの水を掛け、火の用心、五穀豊穰、商売繁盛を祈願する〕

☆同 遊佐町のアマハゲ

〔ナマハゲに同じ〕

☆石川県能登半島のアマメハギ

〔ナマハゲに同じ〕

☆佐賀県見島のカセドリ



図90 「那智の扇祭り」 和歌山県 熊野那智大社（熊野那智大社提供）

〔傘を被り藁蓑をつけたカセドリ2名が勢いよく家に飛び込み、手に持った青竹を激しく畳や床に打ち付けて悪霊を祓いその年の家内安全や五穀豊穰を祈願する〕

☆鹿児島県川内市甕島のトシドシ

〔天上から首のない馬に乗って、近くの高い山や大きな岩、大木などに降りる。高鼻の奇怪な面を付け、藁蓑で覆われたトシドシが子供(3才～8才)と対話しながら長所を褒めて励まし、短所を指摘、自覚させて年餅を授けて去る祝福の神〕

☆同 三島村薩摩硫黄島のメンドン



図91 薩摩硫黄島のメンドン
来訪神が被る仮面（三島村教育委員会提供）

〔開催日旧暦8月1日、所かまわず出沒、徘徊して手にしたスッペン木で叩き禍を祓う、竹かごを逆さにしてそれに紙を張り重ねて被る。左右の耳と眉は渦巻文様、その他は格子柄文様。藁蓑で覆われている〕

☆同 十島村悪石島のボゼ

〔開催日旧暦8月1日、昔は奇怪な容姿のボゼの神はトカラ列島各所に出現したが、現在は悪石島に限定される。ボゼに扮した3人の若者が穢れを祓いご利益があるという赤い土を長い棒につけて観衆を追い掛け回して土を付ける〕

☆沖縄県宮古島のパーントゥ

〔全身に泥を塗り蔦草を巻き付けた仮装神が、泥をなすりつけ新築の家のお祓いと子供の無病息災を祈願する〕

☆沖縄県石垣島川平のマユンガナシ

〔蓑傘に杖のいで立ちのマユンガナシが川平の家々を巡り、五穀豊穰と家内発展を予祝する〕

◎ 上の村の真世加那志の由来 ◎

むかし昔、石垣島の、後に川平の村に吸収された仲間村が、まだ一つの村であった時代、調度、村は節祭(セツマツリ)の日でした。

当時、節祭の日には新年を迎える日であり、新年を迎える祭りを村人達は楽しみ、村は賑わったものでした。

ある節祭の夕刻のこと、或る旅人が仲間村にやってきました。

この旅人の言うことには、川平の北の海で難船し、命からがら上陸して、身なりが見すばらしい今の姿のままここまで辿り着いたところで、なんとか一夜の宿を乞うため、今、各戸を回っているところだと言います。

ところが村人は、宿泊どころか、誰も相手にしてくれないのです。

旅人は、大層、困り果ててしまいました。

そんな時にふと見ると、村の南端に、一軒だけ回っていない家があるのに気付きました。最後の一途の望みをかけ、旅人はこの家を訪れたのです。そして、村の全ての家を回ったものの断られ続けてここが最後であり、どうにか一晩だけでも泊めてもらえないかと必死に御願いしました。

全部に断られた経緯を聞いた主人は、とても同情を寄せ、もしもこのような貧しい家でよかったですと答えたのです。

旅人が家の軒下でもどこでも構いませんと言ったところ、主人は家の中に快く招き入れたのです。

主人に向って旅人が言うことには、「よその家は新年を迎えて賑やかですが、この家はほんの少し淋しい気がいたします。何か訳でもあるのでしょうか。」と。

そう聞かれて主人が答えることには、「たしかに貧しくても、火と水さえあれば、私には満足なのです。」と。

さて夜中になって、ふと主人が目覚めたところ、庭で神々しく何かを唱える声がします。

そしてふと横を見れば、寝床にいる筈の旅人の姿がありません。不思議に思った主人は庭に行ってみました。

すると旅人が庭に立っていて、神詞を朗々と唱えていたのです。

それを見た主人は、とても恐縮して、唱え終わるまでじっと待ち、終わると家の中に再び招き入れると、こんなものしかありませんがと、お茶を出したのです。

さて旅人はお茶を飲み終えると言うことには、「わたしは人間ではありません。天の神の命を受け、正しき心をもつ人間を見定めて、その者に諸物作りを授けるために使わされて、ここまでやって来ました。この場所で諸物作りの神詞を唱えて福を授けたからには、必ずや貴方はこの先、幸福に迎え入れられる事でしょう。来年、戊(ツチノエ)の戊(イヌ)の日に、

また再来します。」と。

そう言い終わるや否や、旅人の姿は、掻き消すように見えなくなっていました。

その事があってからというもの、主人である南風野屋(ハエノヤ)の作物は常に豊作が続き、やがて牛や馬を購入することが出来るまでになりました。

南風野屋の主人は、神とその天使に対する感謝の気持ちをひとときも忘れることなく、再来の日を、ひたすら心待ちにしておりました。

そして遂に、戊の戊の日の夜がやってきて、約束通り天使は来訪したのです。

以前とは打って変わって今度の旅人のいで立ちは、それはそれは立派な神の御姿をしておりました。

その天使は、庭で再び神詞を神々しく唱えました。それが終わった後、主人は家に招き入れると、お茶を出して接待しながら、今までのことを報告したのです。

「神詞を授けて頂いたお陰で、諸作物の全てが豊作になりました。本当にありがとうございました。心からお礼申しあげます。」と、そう言いながら深々と頭を垂れ、謹んで感謝の意をあらわしたのです。

さてその後ですが、天使は来年も三度目の来訪を約束して、姿を消しました。

また南風野屋の農作物は、以前にもまして大豊作が続き、家運もまたますます上昇し、繁栄を極めたのです。

さてそうなるや村の人々は、独り南風野屋だけに大豊作が続いて、牛や馬を手に入れるまでに繁栄する様子を不思議がるようになって、次々、主人にあれこれ尋ねて来るようになりました。

そして人々は主人から、真世加那志の天使の来訪の事や、神詞を授けて頂いた、事の次第を聞いたのです。

そして村の誰もが、天の神への信仰を切望するようになりました。

主人は、天使の三年目の来訪の際、いつものように家の中に案内した後に、村人全てが天の神への信仰を願っている旨を申し上げてみました。

すると天使が言うことには、

「村全体が、天の神を信仰することこそ、私天使の目的として、この上ないことです。私は自分の役目を果たすことが出来ました。これからはもう来訪するには及びません。

ところで、私一人がこれから全ての家を回って、神詞を唱えるには、その数が多過ぎて難儀です。

そこでその代わり、神の代理として、戊年生まれの者達を村の中心にし、他の者達を組織するのです。そして戊年生まれの者達は手分けして、毎年各家々を訪問し、神詞を唱えるのがよい。

但し、各戸を訪れるその前に、すべての元である南風野屋に、戊年生まれの者達全員が集まって、まず最初の神詞三句を揃って朗読しなさい。そして、杖を突き、"ン—"という合図で、一斉に自分が受け持つ家々を回りなさい。」と。

天使はこのように言い渡したのです。

主人は重ね重ね、自分と村人達の感謝の気持ちを述べ、更に、天使の神詞の朗誦のお陰で、フーユー、マユー(世界報=ゆがふ)をみんなが迎えることが出来ると喜びました。

そして、豊作の米をはじめとする自分が作った物すべてを、天の神への土産として是非ともお持ち帰り下さいと申し出たのでした。

この様子を天使はとても満足し、土産と共に恵比寿顔のまま、姿を消したそうなの。』

※世界報 来訪神が人々に穀物の豊穰や幸福をもたらすと信じられていることで、各家を訪問した際にのべる祝いの言葉や耕作方法を盛り込んだ言(世界大百科事典・旧版)

※引用 みんなで楽しもう！～琉球沖縄の、先祖から伝わってきたお話し～奄美・沖縄本島・沖縄先島の伝沖縄説

沖縄先島・沖縄県石垣市川平～「川平村の歴史」
沖縄先島・沖縄県石垣市川平・下の村～「八重山民俗誌」上巻

上山市のカセドリと石垣島のマユンガナシを除き他の行事はユネスコ無形文化遺産に登録されているが、遠く離れた山形と佐賀において「カセドリ」との同一の名称を使用しているのは興味深い。

ほとんどの来訪神行事において決して素顔を見せることなく奇怪なお面、笠、藁蓑などでの仮装に共通性が認められ、多くの行事ではナマハゲに代表されるように子供へのしつけと怠ける大人への訓戒という人間教育に重点が置かれている。

◎来訪神 “マユンガナシ” とアイヌ語◎

来訪神行事の由来がこれほど明瞭、且つ「天上の神への信仰と感謝」及び「人間の行為」の実践と遵守が五穀豊穰や家内発展に結びつく事例は「マユンガナシ」において他に例がない。

マユンガナシに関しては石垣市川平地区の南風野家と田多家に伝承が残る。

前者は「久場川 “上の村” の由来伝承」及び「南風野家と群星御嶽(ンニブシウタキ)伝承」、後者には「内原村 “下の村” の由来伝承其の一、其の二」があるが、前者と後者では伝承内容に相違が見られる。

では、そのマユンガナシという言葉にはどのような意味があるのだろうか。

沖縄の方言を収録した沖縄大百科によると、～ガナシ(ガナシー)は敬称或いは尊称につく

接尾辞で「～様」の意味である。

一方、マユンに該当する沖縄方言や和語は見当たらない。

唯一アイヌ語の中にマユン「mayun＝愉快的な音する」及びマユン マユン「mayun mayun＝鳴り響く」なる似た発音の単語を見出すことができた。

二つのアイヌ語からは自然界における雷音(雷鳴)が想定され、マユンガナシとは「雷様」、つまり「雷神」を意味しているようだ。

「雷神」とはアイヌ民族の英雄神であり、文化神であり、貴重なヒエをもたらした農耕神でもあるオキクルミの別称である。

そのオキクルミの搭乗機であるシンタには雷鳴を発する特徴があるとアイヌの口承文芸は記している。

また「愉快」という言葉には“気分の高揚”との意味があり、川平の人々はオキクルミの



図92 石垣島の訪れ神 マユンガナシ

南風野家と群星御嶽 ～南風家の伝承～

『南風家の娘が、ある神日和の夜、目を醒まして外に出て天を見ると、群星の真下から森に向って長い円筒形の霊火が昇降するのを見た。
その後もこの神日和の日に不思議な火が群星と森の間を昇降するのを見た。
不思議に思った娘が森を隈なく探したところ、白米の粉を以て丸く記された痕跡があった。
此处で神を信仰せよという神の啓示と悟り、部落民

ともそのことを語りあってその場所に御嶽を創建した。
川平部落では最も古い御嶽で部落信仰の中心、五穀豊穰、無病息災の祈願所となっている。』
※南風家は部落が仲間村にあった時代、中底森の南端にあったといわれる。同家の庭には「片髻石」と称する神石があり、マユンガナシを歓待したという伝承がある。

来臨を予兆するシンタの雷鳴に特別な情感と畏敬の念を抱いていたと考えられる。

シンタの飛行音に由来してマユンガナシの呼称が誕生したと見られることから、雷鳴＝マユンガナシ＝オキクルミの等式が成り立ってくる。

状況は異なるが「雷鳴」に対する川平の人々が抱いた畏敬の念は、図らずもアイヌモシリを去るに当たってオキクルミが遺した口承文芸の一節を想起させるものがある。

またマユンガナシの伝承からは「困窮する他の人に援助の手を差し伸べる」という人間本来の行動姿勢が求められ、「人間の基本的条件」が明示されているのである。

まず始めに南風野屋(ハエノヤ)の主人がマユンガナシ、及び天界の神へ帰依してマユンガナシが教示するところの真の人間世界の建設を実践し、その行動に共感した村人たちは南風野屋の主人同様に天界の神へ帰依して人間世界の建設に邁進したと考えられたのである。

その行為の遵守と履行とによって幸福と繁栄に至る恩寵が約束されることとなったのである。

一般的には、来訪神が現れることで五穀豊穰、無病息災、家内安全、子孫繁栄など幸福が訪れるかのように考えられがちではあるが、その根底にはオキクルミのかけがえのない遺産である『アイヌ・ネノ・アン・アイヌ』(人間らしく生きる)という条件が付帯されているこ

とを忘れてはならないのである。

八重山諸島には神が訪れる神聖な地(聖所)とされる多くの御嶽(ウタキ・オン)が存在する。

石垣島には「火の神」と呼称される3カ所のウタキを含む42カ所のウタキがある。

「火の神」は沖縄地方では「ヒヌカン」と呼ばれて火に宿る神「かまどの神」として信仰の対象となっているが、元来は太陽信仰であったものが時代の経過とともに地上の火の中に太陽の化身(太陽神)を見出すようになったことで「太陽神マユンガナシ」が「かまどの神」へと置き換わったと見られる。

本来は火の神＝ヒヌカン＝太陽神であるという。

一方アイヌはカムイノミやイチャルパなどの神事、祭事において、まず設けた囲炉裏の精霊とされる「火の神(アペフチカムイ)」に対して感謝と祈りを捧げているが、こちらでも第一義的存在である筈の「太陽神オキクルミ」が「火の神」へと置き換わっている。

両者には「かまど」と「囲炉裏」、「火の神」に共通性が認められるが、何れの地域においても「太陽神」が「火の神」へと置き換わったことで真実が見失われているのである。

また川平村の重要な祭場である群星御嶽(ンニブシオン)には、マユンガナシと関係が深い南風野家の娘が「神日和の夜中に群星(スバル)の真下から森に向って長い円筒形の霊火が昇降するのを幾度も見た」と伝えている。

マユンガナシ

『マユンガナシは、ニーラスク、カネーラスクと呼ばれる神の国から訪れる来訪神で、村々に豊年と幸福をもたらす神として信仰されてきた。かつては川平から東の中筋、桴海、野底、伊原間、平久保、久志真、安良の各村でも神事が行われていたが、現在は旧暦の9月10日に石垣市の川平地区

のみで行われる行事である。

蓑傘を被りクバのいで立ちに長杖を持ったマユンガナシが各戸を周って家長より饗応を受け、五穀豊穡や家内安全を言祝し、また農事の心得を伝える神言を唱えるという。』

同御嶽は太陽マークと想定される徴が付けられた場所に創建されており、南風野家の娘が目撃した長い円筒形の霊火とは、「U F O」であったと考えられた。

マユンガナシの「マユン」がアイヌ語での解説を可能とする以上、マユンガナシはオキクルミと同一神として見ることができる。

ならば必ず九州及び南西諸島にもアイヌとの関係性を物語る文化が存在する筈である。

果せるかな、その地域には以下の如くアイヌ語と考えられる地名や類似文化の存在を見出すことができるのであった。

- ・削りかけの風習。
- ・シラヌイ、チプサン、ピナイ、カビラ、ベップなどのアイヌ語の存在。(詳細は次号にて紹介)
- ・南西諸島の女性とアイヌの女性とに見られるイレズミ(ハジチ)風習。
- ・土器文様、薩摩隼人の盾、及びメンドンの渦巻文様とアイヌのモレウ(渦巻文様)の類似。
- ・明治期前半のアイヌと沖縄・石垣他などに残るバラザン＝藁算(結縄＝ケツジョウ)の文化。

そして、沖縄県恩納村には豊年祭などで神が降臨するといわれるクバの林の大きな木に結わえ付けられた大きな藁算を交換する風習が残り、石垣市川平ではマユンガナシの行事に限定して今尚「藁算」を活用しているのである。

来訪神行事は日本の風習として限定しがちだが、決して日本だけに限ったものではなく海外でも類似行事は存在する。

- ・英国・アイルランド「ママー」
- ・スイス「ジルベスタクロイゼ」
- ・オーストリア、ドイツ東部、ハンガリー、ルーマニア北部「クランプス」
- ・スロベニア北部「クーレント」

などがそれに該当する。

クランプスは良い子にはプレゼントを与え悪い子を戒めるという。

米国のネイティブであるホピにも次世代の子供の行事を対象とした「ポウム豆祭」における類似の行事が継承されている。

仮装と鬼の仮面などの奇怪ないで立ちで現れ「子供たちに褒美を与える一方、恐怖としての教育的しつけを目的」としたパフォーマンスを行うのである。

日本の来訪神行事の代表格である「ナマハゲ」との強い類似性が指摘される。

来訪神行事は地域によって名称、コスチューム、パフォーマンスなどは多種、多様であるが「他のひとのため」というオキクルミが教示した「アイヌ・ネノ・アン・アイヌ」という人間教育の基本的規範の実践が根底にあり、それを遵守させるべく「戒め」が存在していると考えられるのであった。

◎太陽信仰の「日願」が仏教の「お彼岸」に融合される◎

オキクルミがアイヌモシリを去るにあたって遺した言葉

『隣国の国の上へ、我は去り、行くべし』と言って去り、また『アイヌに怒って行くけれども汝ら全体の人へ怒って行くのではないから、それを心に留めよ。汝ら若し、この後とも沙流川の岸へ、イナウを砌に上がる時、雷鳴が沖の方に起こらば、そして、一度音があって沙流川の河口に響き、しばらくしてまた、再び沙流川の河口に雷鳴があつ

たなら、その二度目の音は我が汝らの里を訪れる音と思うべし』と、そう言ったそうである。だから雷の音が、そのように聞こえる折には、村人はあわただしく外へ出てオキクルミの来迎であると言って、伏し拝む習いがあった。

※引用 アイヌ文化志 金田一京助選集

本州以南の都府県別イナウ状「削りかけ」分布の一覧を参考にすると、「削りかけ(ケズリカケ)・削り花(ケズリバナ)」の名称が全国的に散見される。

東北地方では「彼岸花(ヒガンバナ)」の名称が多いが、総じて五穀豊穡、子孫繁栄(子宝祈願)、果樹の豊作祈願などという用途に即した名称が多く見受けられる。

また「削りかけ」は山の神や神仏などへの捧物(供物)にもなっている。

では、特に東北地方において小正月や春彼岸に削り花を作成して供える風習があるが、「彼岸」という言葉にはどのような意味があるのだろうか。

一般的に「お彼岸」とは、「到彼岸(とうひがん)」という意味を持ち、煩惱や迷いのある世界から悟りの開けた世界へ至ること、至るために行う修行のことを指しているという。

春分・秋分を中日として、その前後おのおの3日にわたる1週間を“お彼岸”と呼ぶ。

この期間に寺院では彼岸会という法会を行い、信者は寺に参詣し、説法を聴聞し、或いは墓参などをするが、このような習俗はインド、中国にもみられず、日本独自の風習である。

彼岸の語源は、サンスクリット語(古代インド・アリア語に属する言語)のparamita(波羅密多=パーラミタ)に由来するとのことで、波羅密多とは仏教用語で「彼岸(パーラム)」

「至る(イタ)」の2つの意味を持つ言葉である

という。

仏教では、煩惱に満ち溢れた現世を「此岸」、悟りの境地である涅槃をあの世「彼岸」と呼び、太陽が東西へ一直線に動く春分や秋分に太陽が沈む真西の方角に極楽浄土(天国)があると信じていた。

このように、太陽の動きや天文学と、至彼岸の浄土信仰(浄土教)が融合して「お彼岸」という風習が誕生したと考えられている。

しかし、彼岸に関してそれとは異なる見解も存在する。

毎年一定の時期が来ると慣習的に繰り返して行われる特殊な生活行為である民間の歳時習俗には農耕儀礼と結びついたものが多く、民間の彼岸行事もまた農耕と関係が深いという。

例えば、京都の宮津市付近や兵庫県の旧美囊郡(現三木市及び神戸市北区の一部)・旧加東郡(現滝野町)などには、彼岸の間に“日の伴(日のとも)”や“日迎え日送り”とって「朝は東方の、日中は南方の、夕方は西方の社寺や堂に参る行事が残っており、原始的な太陽崇拜のなごり」と考えられている。

信州北安曇郡には「日天願(ニッテンガン)」という言葉が残っている(五来重1982)。

また北関東地方の栃木県や福島県中通り地方の南部から中部にかけて、太陽を祀って五穀豊穡を願う民俗芸能の『天道念仏踊』が執り行われている。

寺の境内や仏堂の前に天棚を設け、日天(太

陽)、月天(三日月)の木牌を立て、その周りを踊り回るのである。

白河郡西郷村の上羽太では、祭壇に日天と月天の飾りと幣束、萱の小束、割竹に千代紙の重ね花形を糊付けしたものを地区戸数分を作り供え、二間四方に区切られた囲いの中で十数人が輪になって7種類の舞を奉納する。

舞の特徴は太陽信仰的要素をよく伝承しているという。

彼岸が太陽信仰(太陽崇拜)と関係があり「日の願」から「日願(ひがん)」に発展したと民俗学者の五来重は解説している。

6世紀頃日本に伝来した仏教が次第に全国へ復旧したことで、それ以前より存在していた太陽信仰的要素が強い「日願(ひがん)」が、仏教の「彼岸(ひがん)」に融合された可能性が指摘されているのである。

東北以南では、ヤマトの侵略に準ずるようにそれらの地域では早くから「日願」が「彼岸」に融合されたか、駆逐されたのか何れにしても「日願」の文言が消えていく。

同時に削りかけの分布が示唆するように、例外を除き早くにヤマトの支配下に入った近畿北部や中国地方にはほぼ削りかけの分布は見られないが、西日本一帯に分布するオコナイにその製作技術が継承されているという。

近畿地方では和歌山県東部、三重県西部、奈良県南部のヤマトと激戦を展開した地域において「削りかけ」の風習が残っている。

全国的にヤマトの物質文化の台頭によって「日願」としての太陽信仰は残念ながら姿を消していくのであった。

だが、本来の目的、用途は見失われてはいるが五穀豊穡や子孫繁栄などを祈願する様々な民間行事の中に「削りかけ」の文化は脈々として生き続けているのである。

本州以南の「削りかけ」は、年の節目となる

正月行事、及び小正月行事との関係性が指摘されそのほとんどは五穀豊穡、家内安全、家内発展、子孫繁栄などの祈願を目的としている。

それに対して、ヤマトの神への捧物(供物)を意味する御幣(幣帛)とは用途を異にしている。

「削りかけ」が全国的分布であることと、アイヌ語と考えられる地名がやはり全国に分布し、アイヌとの類似文化の存在を熟考すると、ヤマト侵略以前の日本には全国的に日本原住民たるアイヌが居住していたとの見方が成り立ってくる。

当然の如くイナウの風習も持ち合わせていた筈で、古代日本では、アイヌのように必要に



図93 天道念仏踊り
福島県指定重要無形民俗文化財
「上羽太の天道念仏踊り」 (福島県西郷村提供)

ホピのまだらとパワースポット(ストーンサークル)

『(中略) われわれはまた、地上はまだらの小鹿のようなものであるともいつてきた、まだらは特定の力と目的を持つ地域である。
われわれの誰もが、大霊と交わるために設けられた各種の波長を授けられている。』

それぞれの習慣的な方法に準じて、命を支える特定の自然法則の働きを実現するためである。
われわれはこの知識を知っているので、大霊の言葉を捨てる気持ちなど、さらさらない。』
(ホピ神との契約より)

応じてヌサを築き「カムイノミ」を執り行っていたと考えられる。

名称、用途は様々だが、イナウの兄弟、姉妹に相当する本州以南の「削りかけ」は民間行事の中に脈々と生き続け、故意に改竄、喪失した日本の真実の古代史をその中に垣間覗くことができるのである。

◎イナウ(ヌササン)はストーン

サークルの代替施設か?◎

イナウに代表される多様なアイヌ文化は、生活環境の改善と人間的教化を目的に天界(宇宙)より航空船シンタで降臨した太陽神オキクルミを淵源としている。

アイヌ文化の中でも特異な用途のイナウは、人間の祈願や感謝の気持ちを天界の神に届けたり、神々の意向をアイヌに伝える仲介者的、メッセンジャー的役割を担っている。

そして、イナウはアイヌの守護神的存在であるばかりか、神からの恩恵に対する返礼でもある。

つまり、大地と接するイナウ或いはその集合体のヌササンには、儀礼具や祭具以上の役目があると考えられ、イナウの役割をストレートに受け入れるなら、例えばそれはある意味において電波の送受信に不可欠なアンテナや増幅器を備えた通信施設そのものであるとの見方が可能となってくる。

またイナウや酒箸は物質を転送する役目をも担っているようである。

S F チックと思われるかもしれないが、物理

学の量子力学の分野に目を転ずると、既に“量子テレポテーション”の実験に成功したとの報告(アントン・ツァイリンガー1997)がなされていることから、イナウや酒箸による物質の転送は可能であると見ることができる。

BC12~13世紀頃の縄文晩期の宇宙的動乱により特殊エネルギーのホットスポット上に構築した「ホピが小鹿のまだら」と表現した世界中のストーンサークル(環状列石)などが壊滅的打撃を受けほぼ活動を停止したが、ヌササンなどはその代用としての役目を担っていたと考察できる。

一方、英国のオックスフォード大学が実施した「ドラゴンプロジェクト」では、メンヒルやストーンサークルから測定器の針が許容範囲の半分を示す電磁的異常を検知したと報告している。

本誌が実施したガウスメーターに異常を検知した忍路ストーンサークル(小樽)での24時間測定会及び日本最大の大湯環状列石を眼下に望む約10段のテラス状(ピラミッド)に形成された黒又山=クロマンタ(青森県・鹿角市)頂上のストーンサークル跡地の測定において、極端な磁気異常が検出されたのである。

そのクロマンタの上空を飛翔するU F Oを見事に描いた画家の鳥谷幡山は、クロマンタとU F Oとの関係性に気付いていたのであろうか。

またフィリピン・ルソン島北部の山岳部族イゴロットからの分派であるボントック族は巨



図94 クロマンタ上空を飛翔するUFO
画家 鳥谷幡山氏がスケッチしたもの 大湯ホテル所蔵

石文化を特徴としている。

彼らには“ある時代天から降りて来た来訪神に巨石の構築を教わった”という興味深い伝承が残っている。

英国はスコットランドのメンヒル「Aberlemno」には2機連結の太陽マークが刻まれ、同国ベンリス北東のメンヒル「ロング・メガ」にも太陽マーク（渦巻文や同心円文）が一面に施されている。

伝承や太陽マークの存在は、宇宙教師（太陽神）と巨石、UFOと巨石との強い因果関係が物語られている。

勿論日本各地にも宇宙文化とも形容可能な巨石文化の痕跡は存在する。

多くは東日本・北日本に集中し、撤去された遺物も含めて15基のストーンサークルと20数本（大正11年現在）のメンヒル（立石）が北海道で確認されている。（宇田川洋校注1981）

オキクルミの降臨の地平取でも2基のストーンサークルが確認されている。

ほとんどのメンヒルは道央ベルト帯（札幌市・白石、北広島市・中ノ沢、長沼町・幌内、恵庭市・モイザリ、千歳市・キウス）に集中し、川岸、高台、農地、及び遺跡などからの発見である。

立石状態を主体に、倒壊、土中に埋没していたものもあり、現在は数本が地元の神社や郷土資料館などに保管されている。

長沼町・幌内の旧ウレロッチ川左岸遺跡からは計11本（角柱石/9・細長い卵型/2）のメンヒルが発見された。

角柱石には、約45km北西に位置する支笏湖モープラップ山麓の安山岩（柱状節理）を使用していると専門家は鑑定する。

アートの発想などで大変な労力と時間を費やして石を運搬する筈もなく、必要性に駆られて支笏湖から幌内（ホロナイ）のウレロッチへと運び円形状に構築したと考えられる。

ウレロッチ及びホロナイに関連するアイヌ語



図95 Aberlemno Sculptured Stones

イギリス・スコットランド、アンガス州アバレンノにある立石。連結したような太陽円盤マークが深く刻まれている。
(イラスト)



図96 Long Meg

イギリス・イングランド北西部カンブリア州リトル・サルケルドの近くにある直径120mの楕円形ストーンサークル（Long Meg and Her Daughters）Long Megはサークルの南西24mにある高さ3.7m、幅約1mの方立石
(イラスト)



図97 長沼神社のメンヒル

には次のような意味がある。

- ・ ure ウレ (皆で～する)
- ・ roshiki ロシキ (建てる「柱など」)
- ・ chi チ (吾等＝われら)
- ・ horoka-moi ホロカモイ (渦＝うず)

ウレロッチを意識すると、「渦の湧く地に、吾等、皆で石の柱を建てる」となる。

往古、ホロナイの人々はこの大地から特殊エネルギーが湧出していたことを認識し、多様な用途に使用すべくその地にストーンサークルを構築したと見るべきで、北海道版「まだらの小鹿」の一つである。

道央ベルト帯に構築したのはストーンサークルであったことは確かだが、ひょっとすると異彩を放つフランスのカルナックと似た列石群が構築されていたのかもしれない。

どちらにしても特殊エネルギーの抽出という本来の役目に加えて古代の航空標識の役目も担っていたのである。

また、ストーンサークルの構築において素材となる石の代替として木材を使用するケースもある。

石川、富山、新潟の北陸3県には、縄文時代晩期に相当する環状木柱列(円形木柱列)、またはウッドサークルと呼ばれる16遺跡が確認されている。(高田他2006)

代表的遺跡として石川県金沢市チカモリ遺跡、同米泉遺跡、能登町真脇遺跡、富山県小矢部市桜町遺跡などがある。

英国における磁器計を使用したハイレク調査では、ストーンヘンジから1km離れた位置でウッドヘンジ(ウッドサークル)の痕跡が見つかり、さらには北東へ3km離れた位置にも「6重の環状を形成するダーリントン・ウォール(ズ)」及び「ブルーヘンジ」といった同種の遺跡が確認されている。

また米国オハイオ州・シンシナティにも同心円状のウッドサークル「ムーアヘッドサークル」が存在する。

同サークルの最近の調査、研究によると、ストーンヘンジのように天文学的事象と関連付けられているのである。

ウッドサークルもまたストーンサークルと同様に宇宙的文化の所産であると考えられるのであった。

メンヒルやストーンサークル、或いは古墳の一部が特殊エネルギー波(音波・磁場など)を放出しているという事実は、海外の研究者の間ではほぼ常識化しつつあるようだ。

アイヌの口承文芸である「英雄の物語」には、ヘルメットと耐Gスーツ(高高度与圧服)状の衣服を身にまとったと推察された英雄神ポイ



図98

北陸地方のウッドサークル(環状木柱列)

真脇遺跡環状木柱列の復元 石川県鳳珠郡能登町
縄文時代晩期 (能登町教育委員会提供)



チカモリ遺跡環状木柱列の復元 石川県金沢市
縄文時代後期～晩 (金沢市埋蔵文化財センター所蔵)

ヤンペ(オキクルミ)がシンタ(U F O)への搭乗に際し、“黒いもや” “白いもや”が覆い被さるヌササンヘシンタを置いたと記している。

ここでは“黒いもや” “白いもや”と形容した特殊エネルギーとイナウやヌササンとの強い関係性が示唆されている。

だが、例えヌササンやストーンサークルが機能して電磁的エネルギーとしての超磁気振動力(SMVP)を放出していても、そのエネルギーのコントロールを可能とするのは特別な立場の人々である地域の祭司や首長に委ねられていたと考えられるのである。

年に1度、6月24日のカムイノミの祭典において、オキクルミが説いた「法や道徳的規範」である“他の人のために人間の行為を遵守したか否か”が祭司や首長を介して問われることとなるのであった。

カムイノミにおいてアイヌの民の切実なる祈願が天界に受け入れられるか否かは“人間の行為の履行” “如何に掛けており、首長、または祭司はそれを民に徹底させなければならず重大な任務とそれ相応の覚悟が求められるのであった。

現在のように祈りに特化した“カムイノミ”を何百回、何千回唱えようともイナウは仲介

者、メッセンジャーとしての役割を果たすことはなく祈願も天界に届くことはない。

それはオキクルミ在世中の約束事(契約)を放棄して偶像崇拜に堕ち入り、アイヌが人間を意味していることを忘れさり、人間の行為の実践を放棄しているからに他ならないが、これは一人アイヌだけに限定されたものでもなく、全人類も同様の立場に置かれていると強く認識しなければならないのである。

地球上の多くの民族には、古代において幾度となく地球規模の破滅的な大変動(カタストロフィ)に遭遇したという共通した神話や伝承が存在する。

最もポピュラーな事象は「ノアの箱舟伝承」であろう。

事前に神(宇宙側)の警告を受け、その警告に従った人々が救済されたという同様の伝承が日本にも3件ほど存在する。

岩手県大野村(現洋野町)の万代座に伝わる「俎板伝承」、同県雫石町の「男助山・女助山伝承」、八重山諸島石垣島の「オモト創世神話」などがそれに該当し、救済された人々によって新時代がスタートすることから「始祖伝承」に位置付けられており、我々はその救済された人々の子孫であることは論を俟たない。

宇宙側はその都度全世界へ救援の手を差し伸べ、地上へ派遣された太陽神は人類が独力で文化的に発展しうる段階に至るまで彼らと衣食住を共にして教導しているのである。

人類は太陽にも匹敵した英知ある功業に対してその宇宙教師を太陽神、また太陽神の搭乗機を太陽円盤と呼んで尊崇し、太陽神と共住した時代を黄金時代であったと神話や伝承の中で語り継いでいる。

しかるに救済された子孫の代表でもあるホピがいうところの第4世界(現在)の人類は、物欲、金銭欲、権力欲に溺れて利便性と安楽性の象徴である物質文明を選択した。

その結果、遊星地球を極限を超えたクリティカルな状態へと貶め、且つ自然破壊の極みである悪魔的所業の原子核を崩壊させてその害毒を地球のみならず宇宙へと拡散させて太陽系をも破壊せしめる宇宙的犯罪へと突き進んでいる現状がそこにある。

宇宙の存在なくして己が存在しえないのは明白であり、我々は偉大な宇宙の恩恵を一瞬たりとも忘れて生きることはできないのである。

火星と木星の中間軌道を実数のアステロイド(小惑星)帯として巡り続ける第五軌道遊星の運命を辿ることは決して赦されることではない。

アイヌは勿論のこと、北方諸民族、及びイヌイット、北欧のサーミなどの民族名称も全て「人間」を意味している(難波啄雄1991)という。

アイヌの墮落故にアイヌモシリを離れる際にオキクルミが遺した通告的意味合いの言葉である「Aynu(アイヌ)・nenno(ネノ)・an(アン)・Aynu(アイヌ)とは、「人間らしい人間」或いは「人間である人間」「人間と同じような人間」などと訳される。

外見が人間に酷似するから人間なのではなく、

弱い立場の「他の人々へ援助の手を差し伸べて人間の行為を実践する」こと、それこそが人間であると「アイヌ・ネノ・アン・アイヌ」には刻み込まれているのである。

約2,000年前の北海道の遺跡からは銚頭と飾り弓の本体の弓幹(ゆがら)が出土している。

これらの遺物には、オキクルミの紋章の一つである見事なモレウ文(渦巻文)が複数刻まれている。

つまり、「縄文ヒエ」や「雌型銚頭」の存在から、北海道のアイヌを原点として列島全域や北方諸民族及び南方系地域にもアイヌ文化を代表するイナウ(削りかけ)の風習が広まったとの結論を導き出すことができるのである。

日本民族を構成するヤマト、アイヌ、沖縄人の中で、縄文人のDNAを一番多く受け継ぐのがアイヌであるという。

北方の諸民族にはオキクルミを想起させる伝承が残り、南方インドネシア・バリ島のウク暦(1年=210日・30週)の第1週目の呼称は、驚くなかれオキクルミの搭乗機の呼称と同じ「シンタ」が採用されている。

その搭乗機の特徴を示すアイヌ語の「マユン



図99 太陽のピラミッドを構成するオベリスクとモザイク大壁画



図100 藁算
稲藁や藁草などを結んで数の記録や計算の道具
(石垣市立八重山博物館所蔵)

(雷音) “なる言葉も残っている。

石垣島の北部(川平)では節祭(しち)において
来訪神 “マユンガナシ” の祭祀を行う。

石垣島の “マユンガナシ” が示唆するように
南方の島々においても来訪神オキクルミがそ
の地を訪れて、イナウやその他の技法を直接
指導したと見ることができるのである。

オキクルミの様々な特徴からその痕跡は環太
平洋一帯に見出すことができ、一例として計
算機にも匹敵する「結縄＝藁算(バラザン)」

「わら算」の共通した結縄文化がアイヌ、石
垣、琉球などに存在する。

また、キプ(quipu)或いはキープと呼称する
南米アンデスインカにも存在するのである。

同じ南米のエクアドルには14Cに基づく先史
バルディビア文化のバルディビア期(6,200～
3,500BP)において、主に九州の縄文土器との
類似が指摘されるバルディビア土器の出土が
報告されている。

「日本古代史つれづれブログ」では、バルディ
ビア土器について次のように解説している。

「土器は、九州熊本、鹿児島、宮崎、本州の
一部から出土した縄文土器の文様と類似して
います。

熊本県では阿高式土器や曾畑式土器と類似し

ています。

また宮崎県では、跡江貝塚遺跡から出土した
縄文土器と比較されました。

跡江貝塚遺跡とは、12,000年前から6,300
年前まで続いた縄文土器文化です。

実は、この6,300年前に大きな意味がある
のですが、それはいずれ、ということに
します。

バルディビア土器には74種類の文様があ
り、跡江貝塚遺跡から出土した縄文土器
の43種類のうちの25種類に同様の文様が
確認されました。」

※日本古代史つれづれブログより引用

著者：青松光晴

タイトル：謎の国々は実在したか

(5)エクアドル に縄文土器が出た！？

URL <https://aomatsul23.blog.fc2.com/blog-entry-108.html>

2024年10月15日

南北アメリカの古代の遺跡からは、オキクル
ミやシンタを象徴とする渦巻文、円文を主体
とした多くの土器が出土している。

ペルーの土器表面に描かれた「八脚輪状文」
と大分宇佐市の貴船平装飾古墳に描かれた
「六脚輪状文」は、脚数こそ異なるが同一系
統の図柄であり、九州の装飾古墳の7カ所には
複数脚の輪状文が描かれて九州と南米との古
代における密接な繋がりが伺われる。

また弥生時代の北部九州には、主に円錐形状
に盛り上がった4脚から8脚の巴形銅器が存在
する。

一見すると複数脚輪状文を立体化した特異な
形状として見てとれるが、年代的に巴形銅器
が古く、文様と遺物ではあるがスタイルの類
似性に驚嘆させられると同時に、両者が何を
モデルとして出来上がったのか、本来の使用
用途が気に掛るところである。

巴形土器について川北奈美(2020)は、「弥生



図101 貴船平装飾古墳横穴
強調モードで撮影した壁画全貌
(写真提供：蔵手文男)

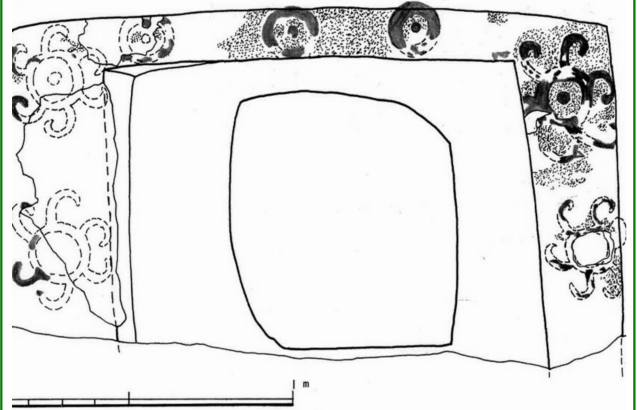


図102 六脚輪状文を装飾する貴船平装飾古墳
横穴実測図
(宇佐市教育委員会提供)

時代後期後半から古墳時代初頭の弥生タイプ(5・6・7・8脚)と古墳時代前期後半から中期初頭の古墳タイプ(4脚が基本、まれに5脚あり)がある。

巴形銅器は、北部九州で発生し、時代が下るにつれて分布の中心が畿内を中心とする。」と解説する。

東征に際して原住民側の首長の籠絡や謀略に邪馬臺国は大量の銅鏡を配付した。

『巴形銅器からみた弥生・古墳社会の特質―変革期に着目して―』川北奈美(2020)を参考にすると、巴形銅器の出土年代や出土分布は、銅鏡の出土年代や出土分布と概ねオーバーラップしているのが分かる。

その巴形銅器の特異な形状は、バイブルの一節を思い出させるのである。

『こうして神は人を追放し、いのちの木への道を守るために、ケルビムと、回る炎の劔をエデンの園の東に置かれた。』

旧約3章24節

エデンの園である「真の人間の世界」の登竜門が、「回る炎の劔」即ちUFO問題であることをバイブルが暗示している。

邪馬臺国は銅鏡に加えて、原住民側が太陽円盤(UFO)を目撃して製作した巴形銅を天孫降臨の正当性を誇示するべく模倣したのである。

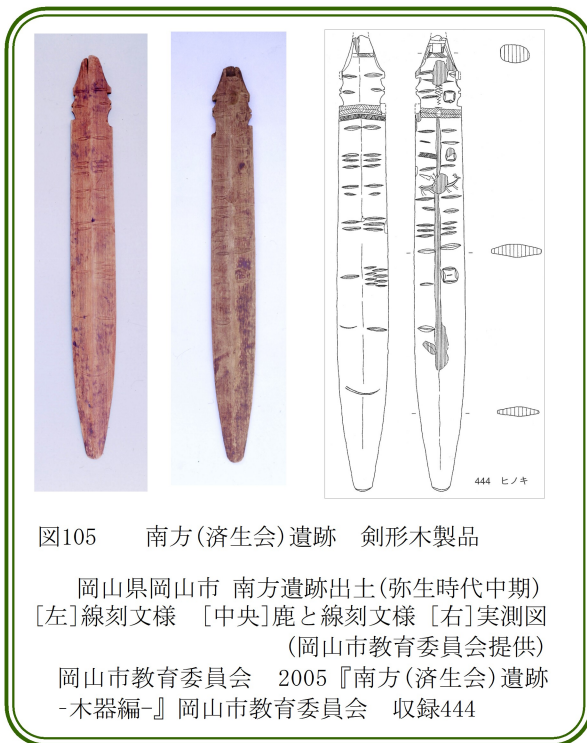
一方、「隋書倭国伝(東夷伝)」には「無文字



図103 貴船平古墳と類似文様のペルーの土器
紀元前180年～西暦500年(シカゴ美術館所蔵)
<https://www.artic.edu/artworks/90934/bowl-with-repeated-spiral-like-motifs>



図104 回る炎の劔(UFO)を連想させる巴形銅器
・弥生時代後期
香川県 森広遺跡 さぬき市教育委員会提供



唯刻木結縄」との記録がある。

「文字は無く、ただ木に刻みを付け、縄を結んで文字代わりにしていた」と解釈される。

豊岡喜一郎(1972))は、このようなスタイルを「アイヌ式のニイナウである」と述べている。

岡山県の南方遺跡からは、「唯刻木」の文言を彷彿とさせる数字を表記したと考えられる「剣形木製品」が出土した。

出土年代が紀元前1世紀から紀元前後と見られていることから数字の文字化は既に弥生時代には常習化していたと見るべきであろう。

「日本の結縄の習俗は少なくとも弥生時代からである」と布目順郎(1996)は月刊「しにか」で述べている。

中国江南地方の蘇州には、算木(中国数学や和算で使用された計算用具)に由来する数字の蘇州号碼(そしゅうごうま)があるが、沖縄の藁算とは別物であるという(内林2016)。

半島や大陸には「結縄・わら算」などの使用形跡が認められないことから、この風習はヤマト民族独自のものではなく、日本原住民で

ある縄文人の風習であると理解されるのである。

南方の沖縄や北方のアイヌでは明治期ごろまで「結縄・わら算」が使用されていたと報告されている。

だが、日本本土ではヤマトの原住民への武力侵略や圧迫が激化したことで、その風習も途絶へていつの間にか消え去ってしまっているのである。

本州以南の削りかけの呼称は使用用途に基づくものが比較的多いが、青森から鹿児島に至る列島全体では最も多い呼称は「削りかけ(花)」である。

そこで、削りかけと関連しているであろう「削る」「引っ搔く」「剥ぐ」などの言葉について、各地域で使っている方言を調べて見た。

結果は以下の通りである。

☆削る 岩手県(久慈市)〔はだける〕福島県〔けっぺずる〕群馬県〔へずる〕長野県〔こそげる〕静岡県〔かく〕三重県・奈良県・和歌山県〔はつる〕大阪府〔へつる・へずる・はつる〕岡山県〔そずる・こさぐ〕京都府・兵庫県・広島県・島根県・鳥取県・山口県・香川県・愛媛県〔こぐ〕徳島県・大分県・熊本県〔こさぐ〕鹿児島県〔こさつ・こそぐ〕

☆粗皮削り 青森県(津軽)〔ガンビはだけ〕

☆引っ搔く 青森県・秋田県〔かちゃぐ〕

岩手県・宮城県・千葉県〔かつちゃぐ〕山形県〔がっちぎる〕

静岡県〔かつちゃばく〕

残念ながら方言の中には「削りかけ」に該当しそうな言葉は見出すことはできなかった。

次に「削りかけ」と似た言葉をアイヌ語の中に求めて見た。

☆削る・引っ搔く [kere ケレ]

☆削る・搔き取る・引っ搔く [kerkeri ケルケリ] [kerikeri ケリケリ]

☆屑・けずりかけ [kike キケ]

☆剥ぐ [kep ケプ]

☆搔く [kiki キキ]

☆作る [kara カラ]

☆造る [kar カル]

方言同様に条件に合致した言葉は見つからなかったが、「ケレ」や「ケルケリ」に「キケ」「カラ」「カル」をプラスした合成語が比較的「削りかけ」の発音に近い印象を受ける。完全に合致する訳ではないが各地域の方言よりもアイヌ語に軍配が挙げられる。

◎まとめ◎

「イナウと御幣の比較表」が示唆する如く両者の相関性は極めて薄い。

本来の用途は薄れてはいるがアイヌ文化の象徴的存在であるイナウ即ち「削りかけ」を筆頭に、アイヌ語の全国的分布、及び九州以南の特定の地域に残る強いアイヌ文化の痕跡が認められる。

次世代シーケンサーによる分子人類学のDNA解析において、日本人を構成する東京人(ヤマト)、沖縄人、アイヌ人の中で縄文人のDNAを最も多く受け継ぐのはアイヌ人(約70%)であるとの解析結果が得られている。

大陸からの渡来人(帰化人)が定着する以前の文化が世界に類例のない約1万6千年に及ぶ縄文土器文化であることは周知の事実であるが、北東アジアの渡来集団に代表される弥生時代(前10紀頃～後3世紀中頃)、東アジアの渡来集団に代表される古墳時代(3世紀頃～7世紀頃)、或いは北東・東アジアのDNAを持つ集団の



図106 ハヨピラに設置されたオキクルミカムイ像横のヌササン

大挙した渡来で縄文人は激減し縄文文化は衰退した。

そして弥生・古墳時代の集団の統一を天皇家に血脈を持つヤマトが成し遂げ、列島南北の両端にアイヌ文化が集中する理由をヤマトの侵略の歴史から窺い知ることができる。

分子人類学のDNA解析が立証したように列島全域に展開する縄文文化の担い手がアイヌであることは疑いようのない事実であり、アイヌ文化の痕跡が残っていても別段不思議なことではなく、本州以南に分布する「削りかけ」は縄文文化の一つとしてその影響を色濃く残しているのである。

以上のことから、ヤマトの御幣がアイヌに伝播してイナウの誕生を見たのではなく、ヤマトがイナウを模倣した結果において御幣が出現したとの結論が導きだされてくるのである。

坪井の「我々からアイヌに伝えた習俗」、つまり「ヤマトからアイヌへの伝播説」や柳田の「削りかけとイナウはふたつの地域で偶発的に発生した、連続性のない習俗」としたヤマトとアイヌの地域間での「偶然発生説」は、御幣との比較においてイナウの出現年代が格段に古いことから彼らの論拠の伴わない説は認め難く、「其の信仰及び習俗の根源は之を

アイヌのイナウに求め得る」との本山桂川の
「イナウのアイヌ根源説」が極めて的を射た
見解となるのであった。

弥生時代の後半から古墳時代にかけて北東ア
ジア及び東アジアの遺伝子を持つ大量の渡来
人(帰化人)が押し寄せ、列島の人口の約7割を
占めたことを核ゲノム解析が明らかとした。

大量の渡来人及び縄文系原住民を支配下に置
き統率したのがヤマトであり、抵抗した原住
民は古文書に記された如く「マツロワヌ民」
として武力をもって誅されている。

また、ヤマトの総帥は己の出自を正当化すべ
くプロパガンダを用いて「天孫降臨」及び
「太陽神の末裔」を流布、ヤマトの先祖を神々
へと祀り上げた神社信仰へと民を誘導して最
終的には「命」をも供出させるという蛮行に
及んでいるのである。

宇宙時代と云われる今日でも尚、多くの人々
を神社信仰へと走らせる現状が見て取れ、パ
ワースポットなる響きに魂を魅了された世界
最大のオカルト的集団が存在しているのも事
実である。

偽りのパワースポットを多くのインバウンド
が訪れており、嘆かわしいの一語に尽きる。

正にヤマトがもたらした「おとしご」的存
在と言っても過言ではないのである。

その結果、神社信仰の代表的祭具が「イナウ」
に似せた御幣(幣帛)と太陽円盤を模倣した
「鏡」であり、同じく模倣した回る炎の劔と
しての「巴形銅器」なのであった。

しかしながら、例えアイヌのイナウが御幣に
すり替えられようとも、イナウを用いた民間
行事及びオキクルミを想起させる来訪神行事
の存在が、かつて列島全土において日本原住
民たるアイヌが居住していたことを証してい
るのであった。

イナウ(ヌサ)がコミュニケーションの媒介の
役目を担っていることの証左の一つに米国の
「the Tree of Life(生命の樹)プロジェクト」
がある。

同プロジェクトでは、樹木を活性化すること
により「木が交信に応用できる」と解説して
おり、図らずもイナウがコミュニケーション
ツールになることを裏付けていたのであった。

次章では、⑦アイヌ文様と土器(縄文・続縄
文)文様、装飾古墳文様の類似性について考察
する。

「the Tree of Life (生命の樹) プロジェクト」

米航空宇宙局(NASA)の科学者とアーティストのグループは生きた木から収集した200年分のデータを音にし
て、木が地球上で経験したことを歌にする「the Tree of Life (生命の樹)」というプロジェクトを行なっ
ている。

これはそれぞれの木のそばで、200年間の光・土壌水分・温度を反映したデータを収集してそのデータをソフ
トウェアを使って、木が発する電波に乗せて、その歌を地球堤軌道上にある小型宇宙船が受信し、宇宙船はエ
ネルギー・速度・通信帯域などのデータを送信する。

これらのデータの数値は音の周波数に変換され歌となりこの歌は断続的に200年間リアルタイムで記録される。
樹木の誘電特性は、持って生まれた電気的な特性であり、これを伝達可能な地上の無線局で、活性化すること
によって樹木全体を大きな生きたアンテナシステムに転換することができるがわかっている。

この研究から樹木の誘電特性は、「種類、大きさ、形状によって異なり、葉の茂り方が変化する季節によって
変わることもある」と述べており木が宇宙船との交信に使うことできる事を実証している。